「住岡夜晃先生と真宗光明団」

「住岡夜晃先生と真宗光明団」　目次

一　生い立ちから青年教師まで
生い立ちと少年時代……………………5
広島師範学校へ入学…………………10
師範卒業と進路の煩悶………………12
吉坂小学校訓導時代の先生…………14
『歎異抄』との出遇い………………17
二　光明団の創立
「光明団」の誕生……………………21
「光明団」の根本精神………………28
盛況だった五周年大会………………34
異安心の非難…………………………36

三　決断と受難の時代
大いなる決断の時・・42
離郷と生活上の苦難・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
愛別離苦　・・49
四　転回と充実の時代
「光明団」の方向転換　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
夜晃先生のご教化の特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
十五周年大会と本部建設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
本部会座の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
教育部会の創設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
夜晃先生と地方巡教・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
真実のみが末通りたもう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
夜晃先生と青年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
五　晩年の結実

終戦と夜晃先生……80
ご晩年の先生……83
コスモスの花に乗じて……90

《付録》

【資料】(Ⅰ)「親しい若い皆様よ」(檄文)……97
【資料】(Ⅱ)「日本を救う道 ― 教育者の皆様に捧ぐ」……106
あとがき……110

一、生い立ちから青年教師まで

生い立ちと少年時代

住岡夜晃先生は、明治二十八年(一八九五年)　二月一五日、広島県山県郡原村中原(現在の北広島町中原)にお生まれになりました。お父さんは勘之丞、お母さんはコチ、先生は郁三と命名されました。先生は長男で、下に六人の弟妹がおられました。家は龍頭山のふもとの山あいの小さな村にありました。この一帯は芸北(安芸の国の北部)と呼ばれ、雪の多い所でした。先生は後に自分の故郷について次のように述べておられます。

「わが故郷は雪の国である。一月二月にもなれば、毎日毎日灰色の空から綿のような雪が暗いように降る。人も通らず、風も吹かぬさびしい夕べ、綿のような雪が、見る間に天地を真っ白にする。積雪満地。天地一白。地上数尺ただ雪である。」

またこの地方は安芸門徒と呼ばれるように、浄土真宗の教えを大切にする土地柄で、お寺参りも盛んでした。住岡家でも毎日朝夕家族そろって勤行が行われ、特に朝の仏参は、幼い兄弟が交代で導師を勤め、それがすむとみんなで「おはようございます」と挨拶をすることが習慣

になっていました。仏さまを中心とした真面目で敬虔な家庭の空気が伝わってまいります。また、農閑期の冬など、近所のひとが集まって、いろりを囲んで夜が更けるまで仏法のご讃嘆が行われていたといわれます。

先生は、幼い時は体が弱くて小さく、心のやさしい、感受性の強い子供だったようです。七歳のとき、原村の明倫尋常小学校に入学しましたが、その夏、自分がやがて必ず死ぬことを思い、悲しくなって毎晩のように泣いたそうです。その様子を見た両親は大変心配して、わずか七歳の子供に仏様の教えを色々説いて聞かせました。先生は後にそのことを、「私は信心深い父と母とによって(その苦しみから解放され)、今考えても涙ぐましいほどなつかしい仏の子の生活を続けた」と回想しておられます。道を歩くときは必ず仏さまへ供えるための花を持ち、口には念仏の声がたえなかったその少年の様子を見て、村の人は「この子は神童だ、若死にする子だ」とうわさしました。学校の成績は常に優秀で、品行も良く、すぐに級長に選ばれました。しかし先生は、その頃の自分について、「意志も弱かったし、肝も小さかったので、級長にされても、皆のためにあべこべにいじめられて、さっぱり治まらない。それでも品行は上であるし、世間からは評判のよい子であった」と述べておられます。

尋常小学校時代のエピソードとして特筆すべきことは、ある夜、本家にお茶講が催され、手次寺(てつぎでら)の本立寺の住職がこられて法話をなさったのですが、その対象はもっぱら十歳くらいの郁三少年(以後少年時代の夜晃先生のことをこう呼びます)であったそうです。住職はそのことを大変喜ばれて、「私も長い間住職として法話をしてきたが、こんな子供を相手に話をするのは初めてだ。この子はとても仏縁尊く生まれている」とおっしゃいました。お父さんはその言葉をとてもありがたく受け取り、しばらく仏前を離れることが出来なかったと、後にお母さんがおっしゃったそうです。

郁三少年は、やがて当時四年制の尋常小学校を卒業して、隣の都谷村にある高等小学校に入学しました。先生の妹の佐々木田鶴代さんの回想によれば、かすりの着物に、小倉のはかまをはき、靴をはいてキチンと帽子をかぶり、大きな白いかばんを肩にかけて、さっそうとして通学するその姿はとてもりりしく、人目を引きました。

その入学した年に、両親は、郁三少年がその小さな体で冬の雪道を通学するのは無理と考えて、学校の近くの叔母さんの家へ一ヶ月預かってもらうことにしました。それから十日くらい経った頃、夕方大雪の中を郁三少年がひょっこり歩いて帰ってきました。お母さんはビックリ

して、「そこにいるのは郁三ではないか。なんの用で帰ったのか。」と聞きました。彼は「はい。お金を十銭無くしたので帰ってきました」と答えました。お母さんは「そうか、では叔父さんに無くしたことを申し上げたのか」「ここへ帰ることのお許しを得て帰ったのか」と矢継ぎ早に聞きました。彼が「何もいわずに帰ってきました」と言ったとたん、お母さんは顔色を変えて、いろりの燃えさしを彼に投げつけて、「お前はお母さんの教えを踏みにじるつもりか。おじさんに申して帰ったのなら、お母さんは喜んで迎えてあげる。今頃おじさんたちは心配してお前の帰りを待っておられるだろう。さあもうすぐにおじさんの家に帰れ」としかって、玄関先で追い返しました。彼は自分の間違いに気づいて、「よく分かりました。すぐに帰ります。ありがとうございます」といって頭を下げ、再び一メートルもある雪の中を出ていったということです。お母さんは曲がったことが大嫌いで、まだ十一歳の我が子に対しても、筋の通らない勝手なことは決して認めませんでした。私たちは後の夜晃先生を理解するカギの一つがこのお母さんの厳しいしつけにあったことを心に留めておきたいと思います。

高等小学校時代のエピソードの一つに、〝はんざき事件〟があります。はんざきは特別天然記念物に指定されている両生類の動物で、山椒魚とも呼ばれています。水のすんだ川の中に生息

し、大きくなると二メートル近くなります。

高等小学校の四年生の秋のこと、学校から帰った郁三少年はかばんを放り出し、近くの川の中に入って一心に棒で何かを探していました。お父さんはその様子を見て、大声で「郁三、危ない！」と叫び、彼を川から引きづりあげました。彼ははんざきを獲ろうとしていたのです。はんざきは歯が鋭く、捕まえようとすると、身を守るために人の手や足の指先を噛んで大怪我をすることがあるのです。

その後、そのはんざきは、近所の青年たちが大きな棒に噛み付かせたまま川から引き上げて、殺してワラ束の中に入れて蒸し焼きにしました。郁三少年はその間、熱心にはんざきの写生を続けました。彼は絵を描くのが大変好きで、展覧会等でしばしば入賞していました。青年たちは焼き上げたはんざきを肴にして酒を酌み交わし、大いに盛り上がっていましたが、彼は黙って部屋の中にこもり、「僕はただ、はんざきを描きたかっただけなんだ、僕がはんざきを見つけなかったら殺されることもなかったのに、本当にかわいそうなことをした」と嘆いて泣きじゃくるので、お父さんはどう言って慰めたらよいか、説得するのに困ったと語っておられたそうです。このように、生き物の命に対する郁三少年の感受性は人一倍強いものがありまし

た。

このようにして先生の少年時代は、何よりも仏様の教えを大切にされるご両親の愛情を人一倍受けて、人間として大切なものをしっかり身につけつつ、のびのびと成長してゆかれたのでした。

広島師範学校へ入学

郁三少年は明治四十二年三月、高等小学校を卒業して広島師範学校に入学しました。数えで十五歳の春です。師範学校は広島市内にあり、当時五年制だったようです。住み慣れた家と両親の元を離れて五年間も寮生活をすることは、郁三少年にとって、子供から大人になるために誰もが通過しなくてはならない大きな節目のようなものでした。勉学はもちろんのこと、この五年間のさまざまの生活体験が、彼を人間的精神的に大きく成長させていったことでしょう。

しかし長男が急にいなくなった住岡家は、火が消えたようにさびしくなり、まだ幼い弟の秋作さんは夕方になると悲しくなって、大きな声で泣いていたそうです。妹の佐々木田鶴代さんの回想によると、六人の弟妹たちは、毎日のように兄からの手紙を待ちわび、手紙が来るたび

に歓声をあげて封筒をあけ、小さな額を寄せて読みあっていたとのこと、弟妹たちがお兄さんの手紙によってお互いに発憤し、励ましあうさまは、まさに純情そのもので、想像するだけでもほほえましくなります。

長い待ち遠しい一学期が終わり、夏休みになると、郁三少年は新しい友達を連れて帰ってきました。そこには、身体的にも精神的にも一段と成長を遂げ、いまや子供から大人への階段を一段も二段も登った、りりしい一人の青年がいました。弟妹はもちろん両親にとっても、郁三少年の目を見張るようなその成長ぶりに、かえって直視できないようなまぶしさを感じられたようです。一緒に植物採集や昆虫採集を行うなど、科学的な知識の世界を探求する喜びが彼の表情にあふれていて、それも彼の精神的世界の広がりを雄弁に物語っていました。

師範学校時代の先生を物語ることがらの一つに、鹿の解剖がありました。それは、田鶴代さんの回想によれば、おおよそ次のようなものでした。

師範学校四年生の夏休みのある日のこと、本家の憲一が山から駆け下りてきて郁三を呼び出し、二人で緊張した面持ちで何かヒソヒソ話をしていた。すぐに二人は家を出て、しばらくして死んだ小鹿を一頭背負って帰ってきた。小鹿はひそかに人里離れた、竹やぶに囲まれ

た炭小屋に運び込まれた。郁三は解剖する前に妹に線香を持ってこさせて、それに火をつけ、合掌黙祷した。そしてまず皮をはぎ、幅広い板に張り付けて、次にやおらおなかを開いて内臓を正確に写生した。そして内部の臓器の働きを私たちに説明してくれ、一つ一つ取り出して、番号をつけ、ガラスのびんに入れてその名称をびんに貼り付けた。教科書や解剖書、参考書と首っ引きで、血に染まった手で書き込んでいく兄の姿には、何か近寄りがたい崇高なものを感じた。極度に緊張し、しかも自信に満ちた面差しはその場にいた者に強い印象を与えた。小鹿をかわいそうに思うものはだれもいなかった。

このようなエピソード一つ見ても、夜晃先生は、決して主観にとらわれず、客観的な真理と事実を何より大切にする、宗教家として最も必要な資質を豊かに持っておられた方であることがよく分かります。その点は科学者に共通するものがあります。

師範卒業と進路の煩悶

先生は大正三年(一九一四)広島 師範学校を卒業されました。数え年で二十歳でした。卒業が近づく頃、成績が優秀であった夜晃先生は、学校の先生から進学を勧められて、進学を希望

しておられました。学校の方からも、直接お父さんに進学を勧める話があったようです。しかしお父さんは、当時としてはすでに老境に入り始めておられて、とても無理なことでした。夜晃先生は中々あきらめきれず、色々な方法で両親に進学させて欲しいと懇願されたのですが、両親の態度は変わらず、ついに不可能であるとさとって、両親の前で「分かりました。就職します」と言い切られました。お父さんはなんども「すまんノウ」とわびられたそうです。

このような親の反対によって子供が自分の希望する進路を絶たれることはこの当時よくあったことですが、やはり夜晃先生にとっては大きな挫折であり、今後の先生の行き方に何らかの影を落としたのは事実です。

妹の田鶴代さんはこの件について、「このことが、やがて兄の運命を大きく変える岐路であり、一つの分岐点であることを知る由もなかった」と述べておられます。

先生が初めて奉職されたところは、同じ山県郡内の吉坂村（現在の北広島町今吉田）の吉坂尋常高等小学校でした。吉坂小学校は、先生の郷里である原村(中原)から約十キロ離れたところにあり、現在の「真宗光明団豊平道場」はそのすぐ近くです。

吉坂小学校訓導時代の先生

夜晃先生が教職に就かれたお年は、満で一九歳ですから、文字通り初々しい青年教師の誕生です。先生は、師範学校で受けた薫陶をもとに、理想と情熱に燃えて、一人一人の子供に熱心に取り組んで行かれたに違いありませんが、その貴重なご体験については、先生自身はほとんど何も語っておられません。ただ、先生は、身辺の世話をしてもらうために、まだ高等小学校の生徒である妹の田鶴代さんを、都谷小から吉坂小へわざわざ転校させて一緒に生活しておられたので、その田鶴代さんの書かれたものでその様子が少し分かる程度です。

それによると、まず先生の外見は、背が高く、色白で目鼻立ちの美しい中々の美青年だったようです。「もめん織りの三つ紋の羽織に、白いじゅばんのえり、白いたびをはいて、気取って歩む人であった」(田鶴代さん)とありますから、想像がつきます。その頃先生は横笛を買ってきて、夕方など、しだれ柳の下で静かに横笛を吹いておられたということですから、そんな先生にひそかに心を寄せる女性がいたとしても不思議ではありません。

その頃の先生の優しさを知るエピソードの一つを田鶴代さんの書かれたものから紹介しましょう。テーマは〝肥やし騒動〟です。

ある朝、それはまだほの暗い明け方であった。突然窓をたたかれて夢を破られた。なんだろう、「田鶴起きて見ろ。」私はおそるおそるカーテンをとって見た。頬かむ　りをした村人が数人、ただならぬ雰囲気が感じられた。

「先生起きて下さい。」と厳しい声、早速兄は服装を整えて外に出た。

「先生こっちに来て下さい。」兄は村人に連れて行かれた。一時間ばかり帰らなかった。

帰った兄は不機嫌であった。しばらく経ったとき、女の声で、「先生今朝はありがとうございました。」とオイオイ泣いてあやまっておられた。兄はとてもあわてて、「はようお帰りなさい。何もいわないこと。知らないことにしておきなさい。」と厳しく言い聞かせた。

学校の肥やしを夜盗んで畑にかけて、知らない顔をしていた人がいた。すると近所の人が見つけた。その人は先生(兄)の許可をもらったのだ主張して譲らなかった。村人は兄(先生)の口から否定してほしかったのである。しかし兄は「私が頼まれて許可した」と言って、平あやまりにあやまって帰って来た。その当時 学校の肥やしは、農民が集まって役場で入札して、最高の価格を書いた人に落札して、一年間その権利を獲得する仕組みであった。その値段は村の収入の一部になる。はっきり兄は法を犯していた。その話を役場の収入役の家

であそんでいたら、(その家の)おばさんが教えてくれた。子供心に悲しかった。兄にその話をすると、兄は「ぼくがほんまにそんなことをすると思うか。あの人はぼくが(罪を)背負わない限り、戸籍が汚されるのだ。あんなにしょげているのを見ると、ぼくはあの子らがかわいそうで、何年か後、ぼくの背負うた罪は消えるが、一度訴えられたら犯罪者として生きていかねばならないのだ。お前もつらいだろうけど辛抱してくれ、誰にも言わないと兄さんに約束してくれ。」兄と私は指きりげんまんをした。

先生はまた、ただ真面目でまっすぐなだけでなく、どこかゆとりがあり、茶目っ気とユーモアに富んだ一面を持っておられました。先生の人間としての豊かさと魅力はそういうところにもありました。今、佐々木田鶴子さんの回想録によって、その好例を紹介いたしましょう。

それはある大雪の降る夜のことでした。ある家の取り嫁、取り婿の結婚披露宴の時のこと、誰も見たこともない大変美しい麗人がある男性に連れられてお酌にまわりました。みんなきっと婿方の身内のものと思っていました。背が高くて、身振り手振りもじつに優雅で、その上にこやかな笑顔を絶やさず、なんともいえない魅力的な風情でした。みんなは手ぬぐいをとってどうか顔を見せて欲しいとしきりに要望しましたが、おつきの男性が、「まことに申し訳

ありませんが、当人はどうしても嫌がりますのでご勘弁を」といって取らせません。しかしみんながあんまり強く催促するものだから、それではといって男性が手ぬぐいをとると、「やあア！」といっせいに喚声があがりました。なんとその美人は見事に女装した郁三青年だったのです。その座の雰囲気が一挙に盛り上がったことは言うまでもありません。先生には時々こんなお茶目なところがあったようです。その他にも色々エピソードがあるようですが割愛します。

「歎異抄」との出遇い

吉坂小学校時代の先生にとってもっとも大きな出来事は、親鸞聖人の語録である「歎異抄」と出遇われたことでした。きっかけは、学校のすぐそばの「薬王寺」の住職である広沢蓮城先生からその本をいただかれたことでした。その時の様子を、妹の田鶴代さんが昭和四十年の「光明」誌に書いておられますので、その文の一部を紹介したいと思います。そのころ田鶴代さんは薬王寺の日曜学校に毎週通っておられました。

ある日、先生(広沢先生)は小さな本を私に渡しながら「お兄さんに差し上げます」とおっ

しゃった。今でもはっきり覚えている。二つの手に持ちながら、お称名をとなえつつ、・・・向きを変えて私にむけて「どうぞ」とおっしゃった。明るい明るいお顔であった。（　中略　）

兄は私の日曜学校の終わりしだい私と一緒に中原に帰る日であった。兄は黙ってその本を読み始めた。すると兄は、「兄さんはこの本が見たいから田鶴一人で帰れ。そのかわり今度本を買ってやる」というのである。（中略）　今吉田(吉坂)に帰ってみると、兄はやっぱりその本を読んでいた。赤い鉛筆を持っていた。・・「ただいま帰りました」と手をついても返事もしないで、父のことも母のことも聞かず、「オイ、侍従武官、(田鶴代さんのこと)お前は大変なことをしたぞ。ここへこい」といきなり私をひざの上に抱きながら、大粒の涙を私の顔に落として泣いた。私はどうしてよいか分からなかった。しかられているのではないことは分かった。そして私を離しながら「お前はよい子だ。連れてきてよかった。この本は『歎異抄』というありがたい本だ。お前は大変なことをしてくれた。兄さんは何回読んだか分からない。それはそれはありがたい本だぞ。」と言ったのを覚えている。

広沢先生は夜晃先生より六つくらい上の方だったようですから、宗門の学校を卒業して自坊に帰っておられたのではないかと思われますが、夜晃先生はその広沢先生のところへしばしば

出入りして、色々と自分の煩悶を聞いてもらったり、念仏の教えをお尋ねになられた節があります。そうでないといきなり「歎異抄」をお渡しになるということは考えられません。

その頃先生は県立師範学校の付属小学校から訓導として招かれておられたようです。師範学校を出て間もない青年教師が、機会あれば教育界に雄飛することを夢見たとしても、それを非難する資格は誰にもありません。しかしこれも両親の強い反対によってあきらめるほかなく、そのことを強く恨んでおられた時期がありました。先生は後年に、二十代の自分の過去をふり返って次のように述べておられます。

私の過去は決して楽なものではなかった。二十歳の春、世の中に出てから今日までかなぐり捨てることの出来ない苦の中に生きねばならなかった。(中略)したがって私の信心生活は、恵まれた者の素純な合掌ではなしに、渋い苦いひねくれ者の血の宗教であり、悪逆者の帰命である。

内面にはさまざまな苦悩を抱えておられた先生が、「歎異抄」と出遇われてどのような感動を持たれたのか、特にどの章のどういう言葉を頂かれたのか知りたいところですが、先生の書かれたものの中には見当たりません。ただ、田鶴代さんの文の中に、先生は「自身はこれ罪悪生

死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁あることなき身と知れ・・・」(後序)を拝読されるときは、しばし黙して瞑目しておられたとありますから、先生が「歎異抄」から何を頂かれたか、少し推量できます。

その後いつのほどにか、今吉田の狭い先生の部屋に近くの青年がたくさん集まってきて、先生の話を熱心に聞くようになりました。おそらく先生はそこで「歎異抄」に出遇った感動を涙ぐんで語っておられたのでしょう。このように、後年の先生の獅子奮迅の宗教活動の芽はすでにこの吉坂小学校時代にあったことが分かります。そのきっかけは「歎異抄」との出遇いであったことも特筆するべき事柄です。

先生は吉坂小学校には二年間おられて、すぐに広島市に比較的近い安佐郡飯室村(現在の広島市安佐北区安佐町)の、飯室尋常高等小学校に首席訓導(教頭)として赴任されました。

二、光明団の創立

「光明団」の誕生

飯室の学校に移られた先生は、「念仏はないし、孤独そのもので、ただ闇の中に苦しんでいた」と述懐しておられますから、ご自身の人生について真剣に苦悩しておられたようです。先生はその自己と人生の根本問題を解く鍵をどこまでも仏教の中に求めていかれました。そこで、村内にある「養専寺」の経蔵に入って熱心に大蔵経をひもとき、経・論・釈を読んで求道精進を続けていかれました。その結果、二十四歳の夏、「信の火がかすかに点ぜられ、如来の慈光によみがえる」とおっしゃっておられますように、ようやく如来・真実と出遇われたのです。ご自分の名前を〝狂風〟と名のられたのはその時です。

〝狂風〟という名前について、後に先生自身は次のように語っておられます。

「私が狂風と号したのは、私が（数えで）二十四歳の年でした。何ゆえに狂風と言ったか。・・・その頃の私は、私自体の無明煩悩も狂風そのものでしたし、大悲の風もまた私を根こそぎ動かす激しい風でした。最初の念仏の夜もまた狂風吹きすさぶ夜でした」

たとえかすかであっても、「信の火」が点ぜられたということは、長い間自分を閉じ込めていた自我の煩悩の殻が破られて新しい自己が誕生することです。〝狂風〟とは、その新しく誕生した自己の名前だったのですね。その新しく生まれた自己は、もうじっとしていることは出来ません。それが、大正七年(一九一八年)十一月十五日に、住岡狂風という名前によって発表された、「親しい若い皆様よ」と題する檄文(げきぶん)だったのです。先生が二十四歳の時でした。檄文とは、自分の信念を述べて多くの人に呼びかけ、新しい行動を促す文という意味です。

後でまた触れますが、「光明団」という求道団体は、実質的にはこの檄文によって呱々の声を上げたといってもよいかと思います。先生ご自身は、翌年(大正八年)一月の、機関誌「光明」第一号の発刊をもって、「光明団」の誕生と考えておられますけれども、この檄文の発表と、翌年正月の「光明」の発刊とは深いつながりがあるわけですね。檄文は吉坂小時代の卒業生や先生の話を聞くために集まっていた青年たちにも出されていたはずですから、反響が相当あったに違いありません。「光明」の発刊はすでに先生の計画の中にあったとしても、檄文に対する反響がその後押しになったことは間違いないと思われます。

さて「檄文」の対象は、その題名〈親しい若い皆様よ〉から分かるように、どこまでも若い

青年男女でした。宗教は老人や病人のためのものであって、自分たちには必要がないと考えているまだ若い健康な青年こそ、本当は一番仏教を必要としている存在だと見破っておられた所に先生の優れた先見性がありました。もちろん先生ご自身まだ二十代半ばということもありますが、仏教、特に親鸞聖人によって明らかにされた本願の仏道の本質を直感的に見抜いておられた先生の領解と思索の確かさをそこに感ずることが出来ます。

「檄文」の書き出しの言葉は次のようなものでした。

「親しい若い皆様よ！皆様は今何を考えて暮らしていますか。何をなして暮らしていますか？何を聞いて暮らしていますか。朝から晩まで考えることは、自分の利益にのみなることや、他人(ひと)の出世や幸福(しあわせ)を見て、悪(にく)むことや、どうかして他人に自分を賢く美しく思わせることばかりが多くはありませんか。皆さまは、濁った濁った世の人々が、自分のほうに自分のほうにと、自分の利益になることや名誉になることばかり考えたり、犬畜生が一匹の魚を争うように、人と人とが争い乱れているのを毎日見はしませんか。皆さま、こんな人たちの中で、やはりその勢いに引かされて、自分の利益や名誉にのみなることや、他人の財産や幸福や風体(なり)を見て、ねたむことや、親兄弟友人を泣かすことや、

むだなお金を使うことや、自分の不幸を嘆くこと、こんな事をなすことが多くはありませんか。」

一読してお分かりのように、先生はまず、このような具体的な言葉で私たちのありのままの現実に問いかけられます。これは一口でいえば、〝君はそれでよいのか〟と言う問いですね。〝私の生活はこのままで本当によいといえるか、何も問題は無いだろうか〟と言う私への問いかけです。私たちは本当は、真実なるものからこのように問われている存在です。その大いなる問いの前にしっかと立つということが道を求めるということであり。宗教への入り口なのです。つまり自分のことしか考えられない我執と虚偽と怠惰に満ちた私の赤裸々な現実に目が覚めるということ、そしてその自覚にたって新しい自分になろうと決意すること、これがこの檄文で先生がどうしても伝えたかったことでした。そのために先生は、この次の文で先生ご自身の痛切な懺悔の言葉を出しておられます。

「ああ！私はつまらない人間です。心は悪いことのみ多く考えていました。目は、悪いことやつまらないことを見るのが好きでした。耳は、世の中の卑しい出来事や、他人の不名誉になることや、無駄なことのみを進んで聞きました。口は、他人を悪くいって・・・欺いたり、

自分を飾るために一番よく使いました。」
そしてどうか今までの自分のあやまりに目覚めて、ぼくと一緒に正しい人、真の人になろうと呼びかけて、
「心の琴線がぼくの心と共に鳴る人、そうだと感じて大勇猛心の起こった人、覚めようと思う人は、一人でも、友達と二人でも、兄弟姉妹と三人でも、ぼくの所に何か書いて送って下さい。」
と結んであります。
この檄文を貫いているものは、どうしてもよびかけずにはいられない先生の燃えるような〝熱〟です。理論ではない、熱が人を動かすのですね。この檄文の全文は、後ろに資料として出していますのでご覧になって下さい。
さて、光明団の機関誌となる「光明」の第一号は、大正八年(一九一九年)一月、広島県安佐郡飯室村の飯室小学校の粗末な狭い宿直室で、謄写版刷りで生まれました。それは雪の降り続く寒い日でした。発行部数は数十部だったようです。しかしこの「光明」を見た村の三、四十人の若者たちはただちに反応して、先生のところへやってきました。先生はこの「光明」の発刊

について、後に、「彼(『光明』)の使命は、決して今日の如く大きなものを理想(予想?)せられてはいなかった。一村の問題であり、青年仲間の小さい営みであったのだ」と述べておられますから、初めから「光明団」という宗教団体を作るおつもりはなかったのではないかと思われます。

実際に初期の「光明」の先生の文章の中には仏教用語は全くありません。書いてあることは、専ら正しい人としてどう生きるか、苦しいことから決してにげてはならないといった人の道についてです。しかし「光明団」という名称は初めから使われていますので、「光明」をはじめて見た人は、これはてっきり修養団体だと思われたに違いありません。先生の本心はもちろん親鸞聖人の教え、浄土真宗の教えを自ら頂き、人に勧めることにあったのですが、それは心中深く蓄えてしばらくは表面には出さず、表面では専ら人が真に人になる道を説くことに力を注がれました。そこに先生の深い配慮があったに違いありません。「光明団」の上に「真宗」をつけて、「真宗光明団」という名称を用いられたのは、五周年大会の後のことであったようです。

考えてみると、私たちが宗教(仏教)によって救われるとは、人間として生まれた者が真に人間になるということ、人間として生きることの尊さに目覚めるということ、このことに尽きる

という一面があります。人の道を説くだけならば修養と同じものになりますが、先生の書かれたものを注意深く見てみると、随所に目覚めるという言葉が使われています。この目覚めるという一点において、修養と宗教との間には天地の差がありました。なぜなら仏の智慧によらない限り人は自らの迷妄に目覚めることは出来ないからです。「光明団」の「光明」が、本来仏陀の智慧を表わしていることは明らかなことでした。

毎月発行される「光明」が活版印刷になったのは二年後のことでした。それだけ反響が大きく、読者の数がどんどん増えていったのです。月々の印刷代と郵送代は、団員になって下さった人から紙代として、毎月三銭受け取っておられたようですが、とてもそれだけでは足りなかったので、先生の俸給の何分の一かはその費用に当てられました。また先生は田舎の両親への仕送りと弟の学資を出しておられたので、先生の生活は食べていくのがやっとという厳しいものでした。後に、「一足の足袋(たび)で一冬を過ごし、裏のない洋服で三冬を忍んだのもこの頃のことであった」と回想しておられます。

また、「光明」誌発刊前後数年間の、先生の勉強ぶりはすさまじいものがありました。「午前二時、三時の起床、寝床を取らない幾夜、風呂にすら入らない幾週間。私にとってのなつかし

い絵巻物である」とは、後年の先生の述懐です。

また経済的ゆきづまりや反対運動など、幾多の苦難が次々と押し寄せて、「もうとても続けられない、今月限りでやめようと何度思ったか知れないが、そのたびごとに私を奮い立たせたのは、『念願は人格を決定す、継続は力なり』という私の信条だった、この信条から起こる声を聞くと、不思議に新しい道が開けた」、とも述懐しておられます。夜晃先生のご生涯を貫いたこの言葉が、すでにこの頃生まれていたことに注目したいと思います。

もちろんその背後には、陰から先生を応援し、先生の力になってくださった方々も沢山あったことでしょう。

「光明団」の根本精神

ここで「光明団」とは一体何か、どういう理念と方針を持った団体(組織)なのかということについて、創立者の夜晃先生が自ら示しておられる文章がありますので、それを紹介したいと思います。それは誕生してから九年後の、昭和二年(一九二七年)一月号の「光明」誌に載っている先生の文です。題目は、「本部より愛する諸兄姉のみ胸に捧げます 五つのおもい」となってい

ます。ここには、先生のお考えがよく整理して出されています。

（一）求道第一

「光明団は日に日に大きくなった。それを見て一つにはよろこび一つには畏る。深く諸兄姉(みなさま)に求めなくてはならぬことは、どこまでも光明団は求道団体であるべきことである。共に一生をかかって如来のみ声を聞くのである。聞くことに始まって聞くことに終わる。法を聞くことによって私たちの信仰は深められ、現実の上に輝いて来る。聞くことをおいて信はない。聞くこと自身が信である。謙虚にひれ伏してみ教えをきく。そこにだけ、人間の汚い我執のとれた、如来によって与えられた世界がある。」（以下略す）

光明団が求道団体であるということは、言い換えれば、どこまでも聞法に徹底して、団員の葬式・法事などは行わないということです。（ただ例外として、年に一回その年に亡くなられた団員の追弔法要はいたします。）

（二）信仰第一

「何よりも信仰が第一である。人はともすれば信仰を獲得することよりも、運動家(や)になりやすい。運動家にはいつでもなれる。事業よりも、学問よりも、運動よりも、第一番に

信仰を得させてもらうことである。理論ばかり分かっても、それが血のしたたる信念とならぬ時、力はない。信仰は力である。死線すら越える力である。信仰がなくて、学問や解釈だけになった時、高慢になる。語る話は売り物になる。親鸞聖人はそれを嫌われた。」

「六字(南無阿弥陀仏のこと)が生命となる。如来が私の生命となる。老人でもいい、女子でもいい。青年でもいい。小僧でもいい。信仰の生きた人のみが光であり、力である。」

「光明団はどこまでも団則によって出来た会ではない。如来によって結ばれた、自由な求道団体である。信仰によって結ばれた兄弟としての集いである。」

(三) 無抵抗の宣言

「真実のみが漲(みなぎ)る世界なら真実の前には非難はない。しかし世間は真実によって充(みた)されてはいない。だから真実すらも非難され攻撃される。釈尊でも、キリストでも孔子でもソクラテスでも、常にこの敵のために苦しめられてきた。然るに聖者たちは決して自ら求めて戦わなかった。・・・唯彼らは、攻撃が来ても、迫害が来ても、流罪が来ても、死刑が来ても、何が来てもちっとも怖れずに、自分の信じる道に突進した。そこには一歩の妥協もない。」

「死刑にされれば死刑にもなった。反対するものがあればその村を過ぎた。流罪も素直に受けた。貧苦も受けた。彼らは大概無抵抗であった。無抵抗のままで、信念の大道を悠々と進んだ。」

「愛する同胞よ。非難されても、攻撃されても、迫害されても、無抵抗のまま受けていこう。決していらぬ議論や、言い訳やに道草を喰ってはならぬ。」

「我等の戦は決して外へではなくて、内へでなくてはならぬ。心の内には戦いがなくてはならぬ。貪欲、瞋恚、愚痴、高慢、邪見、嫉妬、横着、等さまざまな大敵がはびこっている。恐るべきはこの敵であり、賊である。私たちは勇士でなくてはならぬ。・・・自分と戦う戦士であり、勇士でなくてはならぬ。」

(四) 同胞愛の深化

「親鸞聖人は、御同朋御同行とおっしゃった。隣人愛の深まった世界である。私どもは聖人のみ心をみ心として、浅薄な功利的な人間愛によって愛しあってはならぬ。浄化された如来回向の信仰によって結ばれてあらねばならぬ。それこそ地上においてたどり着くべき一番深い聖愛の集いである。

如来によって結ばれた以上、誰とも手を切ろうとしてはならぬ。如何に団員の人が罪悪におちて行こうとも、手を切ろうとするのは自分の罪悪を知らない善人顔の人のことである。しかし縁尽きて逃げる人を無理に引きとめようとしたり、或いはその人を非難したりするのも、それはまだ世界が深まっていないからである。縁あれば伴い、縁なければ離れてゆく。それがわかるのは深い智慧の世界においてである。」

「私たちは一人でも多く友を求めようとする。一人でも多くの人に法をすすめようとする。しかしもし如来を忘れ、我を取り落として、唯他人の世話ばかりになったり、勢力を拡張することにかかわったりする時、聖愛の天地を出て人間我執を出して、囚われの世界に泣くのである。」

夜晃先生にとっての光明団は、師と弟子という縦の関係ではなく、どこまでも本願によって必然的に結ばれた横の関係、つまり平等な友・兄弟(姉妹)の共同体でした。この点、先生が「親鸞は弟子一人も持たず」との「歎異抄」第六章の意(こころ)に立っておられることがよくわかります。

(五) 量よりは質、幅よりは深さ

「光明団はどこまでも、数量よりも質を求める。皆内容の充実した粒になろう。吹けば飛ぶような無内容の人たちが集まって騒いだって、烏合の衆は弾丸の音一発、聞いたら逃げてしまう。学問を言うのでもない。地位をいうのでもない。もちろん富でもない年齢でもない。心の内に如来回向の信仰が充実した、重い重い粒になろう。・・・量よりは質、質の充実こそ私どもの眼目である。

学歴がある。地位がある。門閥がいい。財産がある。世間から知られている。それらは人の間口であり幅である。今の時代は幅をほしがる。間口だけを広げたがる。しかし真の力と、真の光は、奥行き、深さの世界に出なければあり得ない。釈尊でも親鸞聖人でも、深さの人であり、奥行きの深い人であった。」

「団そのものの精神、団の同胞の生き方は、どこまでも量よりは質、幅よりは深さを生きることが精神でなくてはならぬ。深さと充実のあるものだけが永遠であり、光であり、力である。」

最後に先生は、広げれば五つになるが、帰着するところは信仰(信心)であると述べておられます。信心の獲得を第一にするとは、「一人たりとも人の信を取るが一宗の繁昌に候」と喝

破された蓮如上人の御精神と等しいと言うことです。また、光明団は何よりも親鸞聖人の教えを大切にし、聖人によって明らかにされた信心・念仏の道を共に歩む僧伽(サンガ)です。しかし東西の本願寺には属さない独立した純粋な求道団体でした。先生ご自身がついに僧籍を持たれなかったことも団のあり方と大きな関係がありました。

盛況だった五周年大会

先生の身を削るようなご苦労の結晶である「光明」誌の反響は大きく、一年、二年とたつうちに団員の数もどんどん増え、大正十一年の暮れから十二年にかけて、地元飯室の青年男女はもちろん、公職について村を支えている人々までが、先生の主張に耳を傾けるようになりました。毎月の例会は幾百人の人で会場が一杯になり、立錐の余地もないくらいだったそうです。先生は学校では主席訓導(今日の教頭職)として責任を十分に果たされつつ、日曜や休みの日はあちこちから頼まれて講演に出かけられるという多忙さでした。

大正十二年(一九二三年)三月の末の二十九～三十一日の三日間、光明団五周年記念大会が飯室の養専寺を会場にして盛大に挙行されました。養専寺の御住職の全面的なご協力があっ

てのことです。記念大会の講師は、当時華々しく活躍をしておられた仏教済世軍の真田(さなだ)増丸先生でした。

夜晃先生の妹さんの花岡美津子さんの回想録によると、五周年大会の宣伝のために、自転車の宣伝隊が十台ずつ、花をつけて三方に向かって繰り出されたそうです。当日はお寺の門前には光明団五周年大会のアーチが立てられ、イルミネーションが明滅して、境内はお参りの人であふれていました。すでに近隣の村はもちろん、広島市内にも光明団の支部が出来ていましたから、その人々がこぞって参加されたのです。もちろん参加者は団員だけではありません。本堂の外に大きく掛け座が作られていましたが、それでも足りないで、第二会場まで用意されていました。まさに飯室村は全村あげて光明団一色となり、村長さん以下村の幹部までが大会の役員となって三日間の大会を支えて下さったのです。今日では全く考えられないことですね。

真田増丸先生の講演について、夜晃先生は次のようにおっしゃっておられます。

「明確な純一無雑な信仰を説き、徹底せる報謝の生活を叫び、政治にふれ、吾人の使命を絶叫する先生。説く人もなく、聴く人もなく、会場もなく、時間も知らず、全てこれ融和して一つの三昧あるのみ」

であったと。

このように五周年大会は想像を超えた盛大なものでしたが、それではこの大会は何か浮わついたお祭り騒ぎ的な一時的な行事であったのかというと、決してそうではなかったのです。確かに感激して会場の雰囲気に酔うという一面もありましたが、それも仏教、本願の教えの真実に触れた喜びから生まれたものであり、深い懺悔を伴った感謝の表現だったのです。したがって夜晃先生は、静かな、底力のある感動が会場にみなぎっていたとおっしゃり、真田先生も「静かな盛んな大会」とおっしゃったようです。このようにして多くの余韻を残して五周年大会は幕を閉じたのでした。しかしその直後に、光明団の存立を揺さぶるような大きな試練が待っているとは、さすがの夜晃先生にも分かりませんでした。

異安心の非難

予想をはるかに超えた盛況であった白熱の大会が終わると、それを待っていたかのように、「青い魔の手」が動きはじめました。光明団は異安心である。俗人で教職にあるものが仏法を説くとは何事か、教職にいたければ光明団をやめよ、光明団を続けるならば教職を去れという

声がにわかに噴出したのです。すると今まであれほど熱心に光明団の活動を支持していた人々の多くが、手の平を返すように光明団を批判する側にまわり、次々と団を離れていく人が出てきました。何ということか！先生は、風見鶏のように、世間の風の向きが変わるとたちまち今までの態度を変えていく人間の正体をイヤが上にも見せつけられました。ゼロから出発して丸四年、ようやく軌道にのり、大きな手応えを得たと思ったとたん、絶望のどん底に突き落とされたような衝撃と苦悩を体験された先生の心中は、察するに余りあります。このような厳しい現実を、先生は〝法難〟として受け止められました。

「異安心」(いあんじん)とは、安心とは信心の異名で、信心がまちがっているという意味です。それもどこかしかるべき機関できちんと審査された結論ではなくて、自分たちの今までの領解とは異なった、新しい考え方や行動に対して、それを排除して自分の立場を守るためにすぐに貼り付けられるレッテルのようなものでした。したがって、すべてがそうではありませんが、その多くは偏狭のそしりをまぬかれないものだったようです。今、「異安心」の問題と「教職と宗教」という問題とは、一緒に出来ませんので、ここでは、異安心の問題について取り上げます。

この「異安心」の問題は、その後の光明団の前に立ちはだかった大きな壁でした。では異安心とは一体どのような内容なのでしょうか。

この年の八月、郷里の本立寺で、火事で丸焼けになった本堂の新築の慶讃法要を兼ねた盛大な盆会が行われました。その時見えた高名のご講師(和上)が、開口一番次ぎのような話をされました。この和上は最近の夜晃先生の活動や三月末の光明団五周年大会以後の世間の動きをよく知っておられたに違いありません。

「聞くところによれば、この部落には狂風とかいう青年教師がいるそうだが、仏さまの道は、そんな師範を出た小学校教師の青二才などに、一年や二年で会得できるほど簡単なものではない。はっきり言うが、狂風氏の説教は異安心である。そんな説教を聞いていると皆地獄に落ちるぞ」(要点のみ・田鶴代さんの文)

一緒にお参りして和上の説教を聞かれたご両親を始め住岡家の人々の心はどんなに傷つけられたことでしょうか。傷心して家に帰ってみると、お父さんは枕をビッショリぬらして泣いておられたと、田鶴代さんは述べておられます。

落ち着きを取り戻したお父さんは、「兄はやっぱり異安心かも知れん。もし異安心ならばこ

れは絶対に許されん。どれだけ多くの人を迷わすかもしれん。母さんはどう思うか」と聞かれました。お母さんは〝流し〟に行って涙を洗い流して、仏前に正座して香をたき、合掌礼拝して、そのままの姿勢で、「お父さん、これから兄の歩みます道のいかに厳しいか、今日み仏さまに見せて頂きました。兄の苦難な道は想像以上だと思われます。しかしどんなに険しい道であっても、仏さまを信じていく兄の道をついて行きましょう。兄を信じましょう」と答えられました。お父さんも「兄が異安心だと周囲から白眼視されても、真実のみ教えを、もう兄から奪うことは出来まい」と納得されて、ハラを決められました。このように、夜晃先生のご苦労の背後に御家族の全面的な理解と支援があったことを私たちは忘れてはなりません。

当時の「異安心批判」の多くは誤った他力思想から来るものでした。この問題について先生は、大正から昭和にかけての団の機関誌「光明」の中で取り上げて、厳しく批判しておられます。その中に次のような一節があります。

「・・・こうなると飯を食えば自力、講演や説教を聞きに行けば自力、目覚めると自力、なんでもかでも自力になって遂には他力で救ってもらうといえば寝ておるより外には仕方がない。こんな馬鹿な他力を釈尊が説かれたり、七高僧や親鸞聖人などが体験したり、書き残し

たりされたのであろうか。もしそんなものが他力であるならば、他力思想はもっと昔に亡んでしまった筈である。」

先生は仏法を聞いて目覚めるためには決して努力精進を惜しんではならないと、努力の必要性を誰よりも強調されました。もちろんそれは私の努力の結果目覚めるとか救われると考えておられたのではありません。仏の本願(他力)による以外にこの私が愚か者と目覚めることも、救われることもありえないことは重々承知の上で、そのためには私の努力精進を尽くす必要があると考えておられたのです。なぜならその本願に帰するためには、自力無功と自分の努力の限界にはっきり目覚める必要があるが、それが自力をよりどころにしている私たちには難中の難なのですね。努力とはそのための努力です。矛盾するようですが、努力の間に合わない、したがって努力の要らない世界に目覚めるためには努力を尽くさなければならない。仏法は聴聞に尽きるといわれるけれども、聞法ほど努力のいるものはありません。

「法蔵(菩薩)の大願力に目覚めた者がどうして眠っておられよう」「懈怠なる者が浄土にゆくことは、河の水が下から上に流れていくよりも困難である」とは、その頃の「光明」誌の中の先生の言葉です。そのような先生の教えに対して、「めざめよというのは自力である。そんな

まちがった教えに迷うてはならぬ」と批判した説教師があり、また先生の講演を聞いた同行の中に、「この先生の話は、このまま救うぞがないから異安心だ」と語ったお年寄りがあったそうです。

このような誤まった他力思想に染まっている同行には、次のような二つのとらわれがあると先生は指摘しておられます。

① このまま救って下さるという言葉を持ってきて、その上に腰を下ろしていること。

② この悪い心(煩悩)はなくならないのだ。仏様はこれをなくして来いとは仰らないのだ、と煩悩の自分をゆるしていること。

他力の教えが煩悩具足の凡夫をこのまま無条件に救って下さる教えであることはまちがっていませんが、それは仏の智慧によってこのままの煩悩の自分を徹底的に全否定されない限り言えないことです。助かる資格も手がかりも全くない煩悩具足のわが身とはっきり目覚めた者だけがうなづくことの出来る教えです。それを慚愧も懺悔もないものが結論だけを握って〝このままのお救い〟といったところに根本的な誤りがあったのですね。その他光明団と夜晃先生に対する異安心の批判はまだまだ色々ありました。それは後にまた触れたいと思います。

三、決断と受難の時代

大いなる決断の時

先ほど触れたように、五周年大会のあと、宗教活動をするのなら教職をやめよ、教職を続けたいなら光明団運動をやめよと迫った一部の青年がその主張のよりどころにしたのは次の文書でした。

「教員タルモノハ常ニ寛厚ノ量ヲ養ヒ中正ノ見ヲ持シ就中(なかんずく)政治宗教上ニ渉リ執拗矯激ノ言論ヲナス等ノコトアルヘカラズ」

この文書は、明治十四年に出された「小学校教員心得」(文部卿 福岡孝弟による)の中の一節のようです。この文書を根拠にして一部の青年が村当局に迫ったので、村も無視できず問題にせざるを得なかったのです。この文書を持ち出した意図は、盛んなるものを妬み、光明団に致命的な打撃を与えることにあったとしても、この内容そのものには一応の道理があり、いくら夜晃先生が教師として抜群な力量を持っておられて、生徒や保護者からの信頼が厚いといっても、あれだけ活発な運動をしてこられた手前、反論出来にくいものがあったと思われます。先

生の宗教活動は、浄土真宗を大切にする土地柄と、今日のような厳しい政教分離原則を持たない明治憲法のもとなればこそ可能だったのです。したがって先生もただちにその道理を認めて、教職をとるか光明団をとるかどちらしかないと考えられたに違いありません。

教職を捨てるか、光明団を捨てるか、文字通り人生の岐路にたち、ギリギリの決断を迫られた先生は孤独そのものでした。先生は大正十二年の「光明」六月号に、ご自分の心境を詳しく述べておられます。そのゆれ動く心の葛藤は、おおよそ次のようなものでした。（要点のみ）

「教職を捨てる」ということは、〝パンの資〟を失うことであり、平安な生活を失うことである。また、飯室小学校に着任して以来満七年間、ひたすら愛情を注いできた学校と、無条件に自分を慕ってくれている純真な子供たちを捨てることである。子供の顔が一度に見える。先生先生と騒ぎ立てる教室のさまが浮かんでくる。かねて覚悟していたとはいえ、無限の執着が湧いてくる・・・。

また、「教職を捨てるのはあまりに惜しい。もう数年もすれば恩給がつくから、今は一時光明団をやめて、それからまたはじめればよいではないか」というもっともらしい常識人の声もおのずから耳に入って来る。

それに対して「光明団を捨てる」ということは、学問よりも名前よりも財産よりも、もっと高価な何かを得たい、永遠の生命、真実のいのちを得たいともがき苦しんでいるたくさんの若人の願いを、道心を無視することになる。あの山この山のおちこちで念仏申して生きている尊い兄姉の涙を裏切ってもよいのか、と内なる声はささやく。しかしその一方で、「あのように迫害されたら光明団はもう終わりだ。団員といっても一時湧いただけで本当に信仰の道に入ったものは少ないぞ」という悪魔の声も聞こえてくる・・・。

先生は、だれもいない日暮れ近い学校の音楽室に入って、椅子にもたれてただ一人ジット考え続けられました。右すべきか、左すべきか、その岐路の内容について、先生は後に次のようにおっしゃっておられます。

「右には栄達と幸福と安逸とが待ち、左には苦難と貧困と波乱とが待つ。よし右の彼方には地獄の火が待ち、左の彼方には光明の天地が横たわろうと、凡心はあくまで右にゆけと命じ、たとい脚下は火の海であろうとも、真理はあくまで左にゆけと命ずる」

この言葉からすれば、この決断は先生にとっては、凡心(煩悩)と真理との戦いであったのです。

沈思黙考されること約一時間、時計はもう夕方六時をまわっていましたが、先生はついに決断されました。

「学校をさる！学校をやめて自由に如来の大悲を叫ぶのだ！」「教職に死して念仏に生きる！」

そのときの、一切のはからいを超えて突然に飛び出した思いを、先生は端的に「生きよ！突破せよ！大死！」と言う言葉で表現しておられます。また、「魂の底から吹き出す力、自然にほとばしり出る、どうすることも出来ぬ、絶対命令」とも言っておられます。先生を超えた大いなる真理（真実）が、先生と一つになって、先生を突き動かしたのです。真理が凡心に打ち勝ったのです。その血みどろの戦いの時間がわずかに一時間であったとは！

「私は私の生命の一道を歩めばいい。一緒に歩む方々が多いのを望まぬ。けれども人一人の歩みが真実であるならば、それは常に万人の道の開拓であった。・・・私は途中で斃(たお)れるかも知れぬ。誰でもいい、私の屍を越えて行かねばならぬ」

先生はたった一時間で、このような決断をなさったのです。この決断がどんなに重いものか、どんなに苛酷な現実を招くものか、その前途がはかり知れない茨の道であることは、誰よ

りも先生ご自身がよく分かっておられたのに、先生はかの、法然・親鸞の両聖を打ち砕いた「吉水教団」の血の悲劇に思いを馳せて、「何という小さな試練だ！」と何度もつぶやかれたのでした。大正一二年(一九二三)六月、夜晃先生二十九歳の時でした。もしこの先生の決断がなかったら、今日の真宗光明団はありえなかったし、この邪見憍慢な私が、親鸞聖人の真意(おこころ)に触れ、本願念仏の道に立つことは全く不可能だったと言わざるを得ません。

離郷と生活上の苦難

同じ年の大正十二年十二月、先生は数十年住み慣れた故郷を離れて、老境を迎えられた両親と弟妹三人を連れて、広島に移られました。家屋敷、田畑、家具等を売り払って資金を作られてのことです。先生はこの一年に、教職を離れるだけでなく、さらに郷里を離れるという決断をされ、実行されたのです。先生にとって、この年がいかに大変な一年であったか分かります。それは先生を全面的に信頼して、先生の決断に黙ってしたがっていかれたご両親、特にお母さんの理解と決断なくしては不可能なことでした。

なぜ一家をあげて故郷をあとにされたのか。それについて先生は次のように述べておられ

ます。

「生活が苦しいから故郷を去るわけでもない。都会生活をあこがれるわけでもない。私は一家の中心であるけれども、たびたび故郷の老父を訪(と)うにはあまりに忙しい体である。しかるに両親は老いゆくままに、ただ私を杖とも柱とも思って生きている。私は私の自由なる活動を欲するために、老いたる両親に一日でも安堵した生活をさすために、家を閉じて出ることにしたのだ。」

先生は長男として、親に対する孝養とまだ幼い弟妹に対する養育の責任を決してなおざりにはされなかったのです。

十二月五日の先生はご家族と共に、祖先墳墓の地に立って、故郷を離れる決意を報告され、静かに合掌して「讃仏偈」を唱えられました。その「讃仏偈」の最後の四句(「仮令身止　諸苦毒中　我行精進　忍終不悔」)を幾回となく口の中で繰り返されて、下の道から出発の時を知らせる自動車の合図も、しばし耳に入らなかったそうです。その時の先生の深い感慨は、どのような言葉をもっても表わすことが出来ないことでしょう。

特に「讃仏偈」のこの四句は、法蔵菩薩が大誓願を説くにあたって、十方の諸仏に対して、私

はたといどのような苦を身に受けようとも、一切衆生のために必ずこの念願を果たし遂げずにはおかないという一大決心を述べたものです。〈たとい身をもろもろの苦毒の中に止(お)くとも、わが行は精進にして、忍びてついに悔いざらん〉、先生は、「私も故郷を後に、もろもろの苦毒の満ちた都会の地に飛び込まねばならぬ。・・・祖先を背に、社会を前に、私はどうしても法蔵のこの偈をわがものにせずにはおられない」と述べておられます。考えてみれば、夜晃先生の、仏法とサンガのために捧げつくされた白熱のご生涯と、光明団運動の原点はここにあったと言わざるを得ません。

それにしても、何のあてもなく、助力者もいない街に家族を引き連れて出て行かれたわけですから、その生活は大変でした。後にその当時のことを振り返って、先生は「さながら喪家の犬のように食うにも困る日が続く」と述べておられます。

赤手空拳、もとより一人の門徒もなく、定まった収入もなく、数人の家族をつれ、家賃(当時五十五円)を払っての生活は、想像することすら出来ないほど厳しいものでした。お母さんは当座をしのぐために度々質屋に通われなければならなかったり、先生もマニラ麻をつなぐ手内職をされた時もあったようです。

それからの約五年間は、先生のご教化が広島市を中心に周辺農村地帯に広がって、次第に本団の基礎が作られていった期間でした。本団の六十年史年表によると、この五年間の先生の東奔西走は特筆すべきものでした。請われるままに、連日のように農村を中心とした県内のあちこちをまわって説法獅子吼していかれました。しかしそのご苦労は段々と実って、各地に次々と支部が出来、同胞も増えて、団の前途に大きな光を見出していかれたのもこの頃です。草創期の光明団と夜晃先生をしっかり支えた加計支部と福山支部もこの時期に出来ました。しかし本部は依然として借家住まいに変わりなく、初めは広島市外の三篠町に設けられましたが、翌年には市内の南竹屋町へ、さらに八丁堀へと、本部を転々と移されねばなりませんでした。

愛別離苦

ここで先生の私生活について少し触れたいと思います。先生は大正十二年八月、二十九歳の時、石田八千代さんと結婚され、三人の女子を儲けられました。しかしその長女の哲子さんが数えで三歳のとき、ジフテリヤという病気のためにアッと言う間に亡くなられました。ちょうど先生が福山に講演に行っておられた時でした。先生は電報を見られて大変衝撃を受けられ、

すぐ帰られたもののその悲嘆と苦悩は底知れぬものでした。しかしその苦悩のはてに、先生はわが子の死を、今まで一度も受けたことのない大説法、無言の大説法として受けとめられました。この実相の前に、一切の理論も学問も崩れて間に合わない罪悪のわが身を引っさげて、涙の中にも、いよいよ一道を新しく歩んでいくことを誓われたのです。

さらに翌年の昭和二年(一九二七年)九月、敬愛してやまない念仏の父、勘之丞さんが七十四歳で浄土に還ってゆかれました。先生は三十三歳でした。わが子と父親と、相次ぐ厳しい愛別離苦に出会われた先生の心境は察するにあまりあります。そのときの気持ちを先生は、「追えども追えども慈父は永遠にましまさず、語れども語れどもついに答えましまさぬ。写真と遺骨、地にある者の心は、愛別離苦の凡情にとらわれて はてなく暗い」と述べておられます。

同じ別離でもわが子と父親とでは、その内容が大きく違っていました。お父さんは七人の子を育てるために度々借金されるなど、苦労の多い人生でした。しかし長男である夜晃先生をいつも「兄、兄」と呼んで大切にされ、先生がどんなに世間の非難や攻撃を受けられようとも、全幅の信頼を置いて、終始一貫先生の宗教活動を理解し、先生と苦労を共にしようとされたのです。そしてご自身は何よりも仏法を大切に頂かれ、何が出てきても念仏もうして、如来に救わ

れきった人でした。したがってそのお父さんを失われた悲しみは、わが子を失った悲しみに比べれば、もっと静かな、底深い寂しさを伴ったものでした。

先生はお父さんの尊い生涯を振り返って、次のように讃嘆しておられます。

「求道を離れては、如来を離れては、父の一生はなかった。如来に救われ、如来に生きて、この世から生の一歩一歩が永遠への白道の歩みであった。」

「父は久遠の如来と一体にてまします。慈父を憶(おも)うとき如来を憶い、如来のあるところに慈父まします。」

先生にはもう一つの別れがありました。それは結婚して三人のお子さんを儲けられた八千代夫人との離縁です。あまりにも厳しい現実に、夫人は二人のお子さんを残して去ってゆかれました。これは、先生といえどもどうすることも出来なかった悲劇でした。先生の悲しみと苦悩のほどはいかばかりだったでしょうか。このように、先生の三十代前半は、次々押し寄せる生活苦、人生苦のために、先生の短いご生涯の中でも一番厳しい〝試練〟の時代でした。しかしこのような赤裸々な苦悩をくぐることなくして、その後の夜晃先生と「光明団」の大いなる飛躍はなかったと言えるかも知れません。

四、転回と充実の時代

光明団の方向の転換

今では考えられないことですが、本部が広島市内八丁堀にあった頃でしょうか、本部員をはじめ何人かの同胞が行列を作って、夜の繁華街を果敢に街頭伝道されたことがありました。妹の田鶴代さんの回想によると、「光明団」というたすきをかけて、ちょうちんを掲げ、タンバリンをたたいて、団歌を歌って、本通りへと繰り出したそうです。関心を持ってくれる人々があると、「光明団本部で主管が待っています。どうぞ正しい浄土真宗のお話を聞いて下さい」と叫び、ついてきた聴衆に、先生が合掌して静かな声で法話をなさるのです。その法話を聞いて感激して、休憩時間に喜捨される方もあったようです。

この街頭伝道に象徴されるように、一人でも多くの団員を獲得することを目標とされた時期がありました。講習会の開催地も、昭和五年の夏までは、備後の鞆の浦の近くのお寺を借りるなど、海水浴も兼ねるような会座だったそうです。それが翌昭和六年から団の方向が大きく変わりました。それを先生が次のように述べておられます。

「この時代までは、団の大衆を獲得することに進んでいた。しかし、それは(空中に)灰を播くがごときものであったことがわかり、急角度に(団の)方針は変わった。大衆ではない、私だ。私自身がもっともっとみのり(法)をいただくことに懸命にならねばならない。大衆をどうするよりも(その)前に、私は私であらねばならない。・・・教人信（きょうにんしん）よりもまず自行（じぎょう）だ。そうだ、自行の臼(うす)をつくのだ。私の周囲には、縁のつながる人がある。私はその一人ひとりを明らかに見ようとした。そうして、来るを拒まず。去るを追わず。因縁ある人と一緒に、より明らかに、そして静かに、お念仏の一道を精進しようと決心した」

「われらは今確かに新しい出発点に立っている。われらにとっての唯一の根本精神は、量の獲得よりも質の純化である。」

このような団の方針の転換にもとづいて開かれたのが、昭和六年(一九三一)の夏季幹部講習会でした。それまで四年間続いた福山の鞆の浦の明円寺の夏季講習会を打ち切って、閑静な山陰(鳥取県東伯郡)の東郷温泉のホテルを貸し切って、八月一日から一週間、本格的な厳しい講習会がもたれたのです。この講習会が、その後の光明団の講習会の原型となりました。先生の講義の内容は「歎異抄」でした。遠近各地から集まった道心に燃える同胞七十五名、その中に

中堅リーダーとしてこの会座を積極的に支えて下さった方々が五人おられました。いずれも山口、島根といった地方の有力なお寺のご住職でした。柳田西信、武井諦了、河野直臣、柳井覚善、幡谷淳信といった先生方です。このようにすでに光明団には、夜晃先生の教えに深く共鳴され、先生のご教化を蒙られた優れた僧籍の方々が団員となって、団の活動をしっかり支えておられたのです。

なおこの年の四月、先生は福山の同胞、石井英一氏の二女和枝さんと再婚されました。先生三十七歳の時です。得がたい良き伴侶を得られて、先生の自信教人信の活動が益々本格化したことはいうまでもありません。

夜晃先生のご教化の特色

ここで夜晃先生のご教化の特色について触れたいと思います。先生は在家のご出身であり、しかも学校の教師の経験を持っておられたために、従来の伝統的な伝道方法に縛られることもなく、新しい独自な方法を編み出していかれました。その中で特筆すべきものを紹介すると、次のようなものです。これらは、今日ではお寺でも普通に行われるようになりましたが、当

時、昭和の初めには全く画期的なことでした。これらも光明団が異端視された理由の一つでした。

① 黒板の利用

先生の講義は常にお聖教(経・論・釈)にもとづいてなされ、主題とその原文、要点を黒板に板書するという方法で為されたため、講義の筋道がはっきりして理解しやすいものでした。当時のお寺のお説教は、聴衆は説教師の話をもっぱら聞くだけで、黒板を使って講義されるようなことは全くなく、板書された文字を見るといったことは皆無でした。また聞き手は、板書された文字を自分のノートに写すことが当たり前となっていたので、講義の始まる前には、必ず大広間に、座って筆記することの出来る低くて横に細長い机が並べられました。この方法によって分かることは、聞法もまず学習であるということです。

② 聖典の活用

同胞にはすべて浄土真宗の聖典(島地大等編・明治書院)を持たせ、講義の時は、常に聖典の該当箇所を開けさせ、原文を押さえて話を進められました。これは講義内容の根拠を明らかにすることによって、仏法の領解が主観的情緒的になることを避けるためです。先生は聴衆の感情

に訴えるようないわゆるありがたい説教よりも、客観的な、論理的骨格を持った講義を重視されました。しかしそれは、決していわゆる学問を中心とした観念的な講義ということではありません。どのような人間も愚かな凡夫に目覚めない限り本願に乗托することは出来ないという本願による救いの道理を徹底させること、すなわちどこまでも真実の自覚を成就するための講義でした。聞き手は聖典の大事な言葉には印をつけ、またノートにも書くので、決してその場限りの聞法にならず、復習するなど、必ず後に生きてくるようになっていました。

寺院を中心とする従来の聞法は、聖典も持たず、ノートもとらないで、ただ惚れ惚れと講師の説教を聞くということが当たり前であり、それが他力の意にかなう聞法と思われていましたので、夜晃先生が取り入れられたこのような方法は、全く異質なものと受け取られたようです。

③ 座談の重視

夜晃先生は午前午後の講義のあと、必ず一時間ばかりの座談の時間を設けられました。説き手は説きっぱなし、聞き手は聞きっぱなしのお説教しかなかった当時に、このような座談を設けるということは従来の聴聞の伝統を破るものでした。これは先生亡き後も光明団の伝統に

なっていて、現在でも、どの会座も講義(聞法)と座談がセットになっています。大きな講習会の場合、座談は十名以内の小グループで行われる班別座談と、全員が集まった中で、夜晃先生と聞き手が一対一で対座して行われる合同座談と二種類ありました。

班別座談では、少人数ですからお互いに心を開いて、よく分からなかったところを話し合って、聞いた教えの中心点を確認したり、自分の現実(問題)との関係を考えたり、先輩の底の抜けた仏法讃嘆を聞くことで、各自の仏法の理解を深め聞法の意欲を高めることが期待されました。特に初心の人の関心と質問が大切にされることはいうまでもありません。

それに対して合同座談は、班別座談では解決しなかった信心と念仏の問題について、夜晃先生と質問者が真剣に向き合って問答し、ついに迷妄の根源が翻される場として設けられました。すなわち、〝如来生きてます〟と、如来の前に徹底して頭を下げることができるかどうか、〝念仏一つで事足りる〟と言い切れるかどうか、それはまさに《如来が勝つか煩悩が勝つか》という真剣勝負であり、その場の雰囲気は緊張に満ちた厳しいものでした。

この座談の重視は、すでにして中世の蓮如上人の強調されたところであり、仏法が一人一人の身につくためには欠かせない方法ですが、ともすれば座談が軽視されるのは、当時でも今日

でも変わらないようです。

先生の講義の内容は、「浄土三部経」をはじめ、「教行信証」「正信偈」「浄土和讃」「歎異抄」など親鸞聖人のもの、また「大乗起信論」「浄土論註」「観経疏」などの論釈書もあって、多岐にわたっていました。何よりも原典を重んじられ、漢文を黒板に板書して進められる先生の講義は決して易しいものではありませんでしたが、先生は前の方に座っているお年寄りを大切にされ、巧みな比喩などを用いて、お年寄りが喜んでうなづくことのないような話はされなかったそうです。それは一見どんなに難しい教えも、先生自身がそれをお念仏の内容として有り難く頂ききっておられたからこそ可能だったことでしょう。どんな講義も、それがお念仏をこころ(意)を明らかにしていて下さるものと分かればうなづいて聞けるのですね。

しかし原典に忠実に一句一節を大切に頂いていかれる先生の講義について、「あれは理屈だ。ご信心にはむつかしい理屈はいらない。ただ信じさえすればよいのではないか」という世間の批判がありました。このような批判（非難）に対して、先生のお考えははっきりしていました。「ただ信じればいいのなら何を信じてもいいはずだ。何を信じればいいのか、如何に信じればいいか。親鸞聖人には極めてはっきりした論理があり、骨格があった。」「その正しい論理のな

い信心が、結局現在のあのだらしのない教界の空気を作ったのであり、青年及び知識階級を追い逃がしたのではないか」

夜晃先生のご教化には常に燃えるようなあつい熱がありましたが、それは冷たい論理の骨格によってしっかり裏付けられていたことを忘れてはなりません。

十五周年大会と本部の建設

昭和八年十二月、創立十五周年の記念講習会が広島市内の八丁堀の本部(借宅)で開かれました。先生の回顧文によれば、街に宣伝もせず、五周年や十周年の時のような賑やかさもなく、人数も五十名余と比較的少なく、形の上では極めて地味で静かな五日間の講習会であったけれども、しかし今までにない真剣で充実した空気が流れていたと述べておられます。先生の講義の内容は道綽禅師でした。

この十五周年大会について、先生は「この大会こそ、一面過去の団の歩みを清算するものであり、一面将来への飛躍の第一歩を画する一大基調をなすものであった」と総括され、光明団僧伽の今後について確かな手ごたえと自信を得られたのでした。そういう点でこの昭和八年

(一九三三年)は、光明団僧伽が草創期の不安定を脱して本格的な伝道活動を展開していくための大きな転換点の年であったと言うことが出来ます。

その十五周年と揆を一にして、かねての懸案であった新本部の建設が着々と進行しました。場所は広島市内の庚午町五一九番地で、現在の本部の場所です。規模は、六間に十三間の総二階、七十五畳敷きの講堂をはじめ、本部員の居室十室等を有する木造の堂々たる建物です。(一間は約一・八メートルです)

この建物は、棟梁 柳川富太郎氏によって造られました。彼は夜晃先生と光明団の活動に深く共鳴され、全くそろばんを離れて誠心誠意、献身的に尽力されました。当時のお金でわずか四千五百円で仕上げられたとのこと、今日のお金に換算すればどれくらいになるのかわかりませんが、これくらいの費用ではこれだけの規模の建物はとても建たないのではないでしょうか。また団員の吉見又一さんも建設委員として、本部建設のために自分の仕事をなげうって東奔西走して下さり、先生はこのお二人のご苦労なくしては本部の建設はありえなかったと深く感謝しておられます。新築なった本部への移転は、十五周年大会後の、年末に行われたようです。

考えてみると、創立以来十五年間、「光明団」は自前の本部(道場)を持たないままで借家を転々としながら活動をしてきたのでした。その不便さ不自由さは推して知るべしです。夜晃先生とご家族の安堵と喜びはどんなに大きかったことでしょう。特に、濁乱の世に真実仏道を明らかにせんとの先生の念願は、ここに新しく本拠地を確保されたことによって、ますます強く、地についたものになったに違いありません。組織論からいっても、本部がしっかりして本部の機能を果たすことなくして支部の活性化はありません。先生が巡教の旅に出ておられる時も、奥さんを中心とした何名かの本部員がしっかり先生の留守を支えて本部を守ったことが団の発展につながっていきました。

夜晃先生が光明団を創立されて、やがてご往生されるまでの期間は約三十年でしたから、創立十五周年は丁度その中間点にあたるわけで、マラソンでいえば折り返し点です。したがってこの後半の十五年こそ、夜晃先生の光明団の最盛期といえるかと思います。目を外に向けると当時の日本は、次第に軍部の勢力が増大して満州(中国東北部)を侵略し、国際連盟を脱退するなど、日本の国際的孤立化が進んで戦争への足音が段々高くなってくる重苦しい時代でした。

本部会座の充実

創立十五周年を終え、本部建設成った翌年の昭和九年(一九三四年)、先生は数えで四十歳を迎えられました。四十歳といえばいわゆる不惑の年です。人の一生の中でも一番精気あふれる仕事の出来る年です。先生はその「不惑」に関して、ご自身については〝不惑どころかいよいよ名利の大山・愛欲の広海に迷惑・沈没しているわが身である〟と深く懺悔されると共に、仏道の歩みについては、〝惑どころかいよいよ如来・本願の真意を頂いてこの道をしっかり歩み通したい〟と述懐しておられます。それは、この年から四年間、「光明」誌に「如来本願の真意」と題した先生の本格的な本願の領解を連載されたことを見ても分かります。

新しい本部・道場が出来たということは、まず何よりも本部の会座が充実するということでした。これまで長い間、本部といっても有って無きが如しで、毎月の例会以外の長期間の会座はほとんど開かれませんでした。先生は専ら各地を回って伝道の旅を続けておられましたから、本部で腰をすえてじっくりお話されることはあまりなかったのではないかと推測されます。

昭和九年、木の香もかぐわしい新築されたばかりの本部で、先生は一週間という長期の講習会を二つ始められました。一つは八月一日から七日までの夏季講習会であり、もう一つは、十二月一日から七日までの報恩講講習会です。夏季講習会は昭和六年に鳥取の東郷温泉ホテルで開かれた一週間の幹部講習会を原型とされたものでした。(昭和七年、八年も場所を変えて開かれています)。報恩講講習会は今まで十二月初めに開かれていた三日間の報恩講会座を一週間とし、これも毎年定期的に開かれるようになりました。

そしてその翌々年の昭和十一年より、三月末から四月初めにかけて、やはり一週間の春季聖講習会を始められましたから、これでいわゆる「三大講習」といわれる年三回の長期講習会がそろったわけです。今後この本部の会座は、毎月初めの三日間の例会とこの三大講習会が柱となり、その後夜晃先生がご往生された後も、ずっと毎年続けられていきました。もちろん夜晃先生がご在世の時は、先生がお一人で全部担当されましたから、先生のご苦労のほどは察して余りあるものでしたが、このような充実した本部の会座を通して、先生のご教化が団全体に徹底していったのでした。

夜晃先生によって始められたこのような三大講習会は、他の教団にほとんど例がないもの

で、聞法の徹底を何より重視した本団の特色がよく現われています。夜晃先生が逝かれてすでに六十年近く経ち、三大講習会は中々困難になって来て、夏季聖会はやむを得ず五日間と二日少なくなったものの、他の春と冬の報恩講講習会は、先生ご在世の時と同じように現在も七日間行われています。仕事や家庭を持っている人が、世間の時間を削り取って七日間本部で寝食を共にして聞法することはとても困難なことですが、もし出来たならば、その感動は計り知れないほど深いものがあります。聞法といっても、一日はもちろん、三日間くらいの聞法では本当は徹底しないのですね。仏法が本当にわかりたいと思うならば、少なくともこれくらいの時間を聞法に集中する必要があるといえるでしょう。現役の仕事を終えられた定年の方がどんどん増えている高齢化社会の時代にふさわしい聞法のあり方ではないかと思います。

教育部会の創設

昭和十年より先生は、例会・三大講習に加えて、毎年、年頭のお正月明けの三日間(後に四日間)、学校に勤める教師のために「教育部会」と呼ばれる会座を始められました。師範学校を出られ、教師としての経験をお持ちの先生は、学校の教師に対して特に熱い願いを持っておられ

ました。教育の根本は真実宗教にあるということが先生の動かぬ信条でした。そこで第一回の「教育部会」の講題は、「浄土の宗教と教育」というものでした。学校の教師こそ、誰よりも仏法によって深く教育されるべき被教育者でなくてはならない、頭を下げて学ぶべき教えを持たない教育者ほどあわれなものはないというのが先生の常の仰せでした。一人一人の子供の背後に如来まします、学校の教師よ、どうか仏の本願に立って、子供たちの中に眠っている道心に呼びかけてくれ、人間が人間の尊さに目覚め、人間を成就していく道はここにしかないと先生は真剣に考えておられたのです。これは今日の日本の、真実宗教なき社会と若者の悲惨な現状をすでに見通しておられたかのようです。

この教育部会は、先生亡き後も途切れることなく、遺弟の細川巌先生を中心とした教育関係者によってしっかりと受け継がれ、今日の光明団の会座を代表する大きな会になっています。何しろ正月の二日夕集まって四日間開かれるのですから、折角の年始の休暇もなくなり、家族とゆっくり過ごす時間を切り裂かなくてはなりません。それも毎年参加するとなるととても大変なことです。家族の理解や協力なくしては不可能なことです。それだけに会座の雰囲気は他の会座以上に真剣で厳しいものがありました。多くの参加者は、年頭ということもあって

いやが上にも求道心をかきたてられ、大きなお育てをこうむって一人前の聞法者になっていかれました。夜晃先生なき後の光明団の大きな特徴である青少年育成活動(少年錬成会など)を担っていかれた方々も、この教育部会から生まれたのです。

「教育部会」は、夜晃先生においては、先にも言うように文字通り学校教育者のための会座として設けられました。しかし先生なきあとの「教育部会」は、学校の教師に限らず、広く仏法を求める人々に開放された会座となりました。学校の教師だけが特別な存在ではなく、広い意味では、子供を持つすべての親は教育者であり、また一般世間においても、家庭や職場、地域など人間関係のあるところ、人が人を教え導くということは誰にもあることです。

考えてみれば、年齢、性別、職業、能力の有無を問わず、どんな人も人間であり、仏法(本願)からはみ出した人は一人もいない。人の上に立つ人も、そうでない人も、等しく仏の教えに照らされて愚かな凡夫に目覚め、諸仏・善知識によって教え導かれる者、つまり被教育者＝仏弟子の自覚に立たない限り、仏法によって救われることは出来ない。そういう意味で現在の「教育部会」は、すべての人が被教育者の目覚めを持ち、仏の教化を蒙って真の人間形成の道に立ってくれという仏の願いを聞く会座なのです。

夜晃先生と地方巡教

ところで夜晃先生は地方のどのような場所で人々に説法しておられたのでしょうか。一年だけみても大変な数であり、一々詳しく調べることはとても出来ませんが、今、一応の目安を得るために、本団六十年史年表によって、昭和七年の一カ年の巡教先の会所を見てみると次ぎの通りです。大まかに、お寺、学校、公共施設、私宅、その他に分類してその数を調べた結果です。

① お寺 ＝ 五十二カ寺　② 学校 ＝ 二十校　③ 公共施設 ＝ 二十二カ所
④ 個人宅 ＝ 二十六カ所　⑤ その他 ＝ 五カ所

これで分かるように、先生は既成教団から異安心という批判を受けておられたにもかかわらず、実際にはお寺でお話されることが非常に多かったのです。これは注目するべきことです。考えられることは二つあります。一つはそのお寺の住職が夜晃先生の教えに深く共鳴されその感化を受けておられたという場合です。もう一つは、その地方に光明団の支部があり、その

寺の門徒でもある団員の有志がお寺に熱心に働きかけて実現した場合です。後者がほとんどで、前者は限られていたと思われます。

また学校が意外に多いということも注目されます。これは公教育の中に特定の宗教を持ち込ませないという憲法の政教分離原則の徹底した今日との大きな違いです。公共施設の中には、公会堂、仏教会館、説教場、旅館、医院などがはいります。個人の私宅で先生をお招きして会座を持たれることも盛んでした。地方によっては、先生がお話をされる家は大体決まっていたようです。

地域で見ると、昭和の初めまでは広島県内がほとんどですが、昭和四年頃から他府県に行かれるようになり、特に岡山が多かったようです。また大阪・神戸方面、四国の高松などにも時々出かけておられます。山陰では倉吉にいち早く支部が出来ました。(昭和五年四月・東伯支部) 島根は昭和五年七月の浜田の顕正寺での法座が最初だったようです。それ以後毎年、浜田、鎌手、益田、井野等のいわゆる石見路のお寺を次々回って説法されるようになりました。昭和六年には益田支部と浜田支部、翌七年には鎌手支部と井野支部というように、相次いで支部が出来、支部が出来ると先生の支部めぐりは毎年大体決まった時期になされ、巡講と呼ばれ

ました。しっかりした本部道場が出来たことによって先生の地方巡講も、本部へ帰っていただくためのご案内という意味を持ちました。ここに本部と支部との有機的なつながりが出来て、教化のための組織が明確となり、教団としての機能が整ったのです。

先生にとって、本部と地方(支部)をつなぐもの、それが念仏でした。地方を巡講されるときは、一人一人の同胞に対して、「お念仏申しているか、お念仏申してくれ」が先生の口癖でした。お念仏申すことが聞法の大切さを確認し、本部を憶念することでもあったのです。

昭和九年(一九三四)には第一回の島根県各支部連合講習会(略して島根県連)が折居の農業組合を会場にして開かれました。初めは四日間だったようですが、後に五日間になりました。講題は「歎異抄総結の文」でした。それ以後この島根県連は、夜晃先生亡き後も島根の同胞によって連綿として毎年続けられ、平成十七年(二〇〇五)七十周年を迎えられました。(ただし終戦の年と昭和五十八年の三隅水害の年と二回中止)

ご講師は、昭和二十三年の第十四回までは夜晃先生で、先生ご往生の後は、遺弟の柳田西信、大森忍、細川巌、岡本義夫、武井滉といった各先生方が引き受けて下さいました。この島根県連が現在も、県内の同胞はもちろん、県外の多くの同胞のご精進によって受け継がれているこ

とは注目に値することです。

一方山口県は、昭和六年から七年にかけて、久米、共和、徳山、右田、須々万といった地方に支部も出来て、その後しばしば巡講されるようになりました。年表によれば、昭和十四年から山口県連も毎年開かれるようになっています。

広島県連は遅れて、昭和二十二年の十二月に、加計で第一回が開かれましたが、二十三年にはなく、二十四年七月に福山で第二回が開かれ、それが先生の地上最後の会座であり、講義でした。(後述)

なお外地の巡教も行われ、昭和十二年(一九三七)には初めて台湾に出講されました。台湾には親しい同胞が幾人かおられたこともあり、翌十三年、十五年、十六年と、合計四回巡教しておられます。また昭和十五年には、朝鮮(現在の韓国)にご親族がおられたので、そこで会座が持たれ、五日間講義しておられます。

(註)ここで先生のお名前の変更について触れたいと思います。実は先生は四十二歳の時、ご自分のお名前を、今までの〝狂風〟から〝夜晃〟へと変えられました。狂風と名のられたのは二十四歳の時ですから、あれから十八年たち、先生ご自身の心境も大きく変わってこられ

ました。そのことについて先生は次のように述べておられます。「これひとえにみ法を求め、大信海に生かされ、念仏の境の静かに深まらんことを念じ、無明の大夜に影現したまう法身無極の光輪、寂静の光に生かされんことを切念するがゆえであります。」

ちなみにこの「夜晃」という名前は、「無量寿経」の本論の初めに出てくる五十三仏の中にある「夜光」から取られたものです。「光」の一字を「晃」に変えられたのはお考えがあってのことでしょう。この本では最初から「夜晃」というお名前で通していることをご承知下さい。

真実のみが末通りたもう

昭和十三年、先生四十四歳の時、団創立二十周年記念聖会が開かれました。八月はじめの一週間の夏季聖会がそれに当てられたようです。先生はこの時の深い感慨を「創立二十周年を迎えて」というテーマで、十数頁にわたって「光明」誌に書いておられます。そこには、法難にも等しい数々の苦難を経て、ようやく人の面でも、施設の面でも宗教団体としての基盤が確立した団の現状に大きな喜びと使命を感じておられる先生のお気持ちがよく現われています。

先生は、「よくも続いて下さったものである。まず私に押し寄せるものは深い感謝である。」と、本仏、世尊、聖人はもちろん、草創期の団と先生を支えて苦労を共にされた多くのお同胞の厚い護念とご精進に対して、改めて尽くせぬ感謝の念を述べておられます。「同胞は如来より賜った私のすべてである。」とはこの時の先生の言葉です。

目前に仰ぐ善知識をお持ちにならなかった先生にとって、親鸞聖人こそ約七百年の時間をこえて生きてまします善知識でした。それはインドの世親(天親)菩薩が約七百年の時を超えて、「世尊、我一心・・」と、釈尊をこの上ない善知識として仰がれたのとよく似ています。と同時に、先生にとっては、何よりも仏法を大切にして、身柄全体が念仏になっている田舎の素朴な同胞こそ、仏法の真実を証明してくれるかけがえのない善知識だったのではないかと思います。

二十周年を迎えられた先生の言い尽くせない深い感慨を結ぶ言葉は、「ただ、大法の如く歩んで恐れざれ。真実のみ末通りたもうがゆえに。」でした。「ただ、大法の如く」とは、人間の一切の我執を超えきった清浄真実なる仏法に、われらの人間的な私情を交えないということであり、具体的には長年の同胞といえども、仏法によらないで、人間的な愛情(情実)によって結ば

れてはならないということでした。これは言いやすくして中々出来ないことです。それについて先生は、「人来たれば大法の如く、人去れば大法の如く、賞讃にも大法の如く、非難にも大法の如く・・・」と述べておられます。

「真実のみが末通りたもう」この一句こそ、先生のご生涯を貫いて変わらぬ不動の信念でした。夜晃先生ほど真実を問題にされ、真実を渇仰された人を私は知りません。しかしその先生にはるか先立って、真実を何よりも大切にされ、真実の前に一切の妥協を排された方が親鸞聖人でした。「顕浄土真実教行証文類」こそ聖人の主著の名前でした。したがって聖人にとって真実とは如来そのもの、如来のすべてであり、如来と別にどこかに真実があるということはありえないことでした。夜晃先生はその聖人の御こころをだれよりも明らかに、誰よりも深く頂かれたのです。

先生は「仏法者は如来・真実を生きる人である。」とおっしゃいましたが、如来・真実を生きるとは、真実まことのかけらもない我執のわが身を、如来・真実に照らされ続けて歩むことです。虚仮不実のわが身に目覚めて、如来真実の前に懺悔念仏することなくして、如来・真実に生かされることは金輪際不可能なことです。

「真実のみが未通る」とは、決して自分の中に真実を肯定することではなく、どこまでも虚仮不実のわが身に徹して、如来・真実を仰ぎいただく(讃嘆する)こと、このことに尽きるのでした。私の中に真実・まことがある、私はまごころを持った人間だと、わずかでも〈真実〉をわが身の上に肯定しようとすると、「そう思ったとたんに、その〈真実〉は、たちまち羽根が生えて飛び立ち、お浄土に帰っていく」と、先生はユーモアを込めて教えて下さいました。

真実のかけらもないわが身に目覚めてみると、そのわが身はすでに如来真実の中にそのまま摂めとられていたのです。したがって先生は「一切の苦悩は、真実の発揮される舞台である」とおっしゃいます。これは先生の数々の痛切なご体験をくぐって生まれた言葉でしょう。

このごろの先生の胸に去来するものは、私は仏法のために自分のいのちを惜しみなく捧げたいという捨身の思いでした。先生には、「汝、大法のために身命を捧げよ」という内なる声が聞こえていたのです。そのことを、先生は「光明」誌の「二十周年を迎えて」という文章の中に、「私の心の底の声が、微かではあるが、汝は大法のために死ねとささやいた。」と書いておられます。先生はちょうどこの十年後、五十四歳でお亡くなりになるのですから、その十年前にはやこの予感がおありだったのでしょうか。あるいは、先生はこの四年後の四十八歳の時、腎臓

病が発覚しますので、すでにこの頃からお体の不調を感じて、自分はもうそんなに長くはないと思っておられたかも知れません。

本部の庭の石碑に刻み込まれた先生の言葉「生命を継ぐ者は生命を捧げてゆく」は、このような先生の胸中から生まれたものに違いありません。

夜晃先生と青年

夜晃先生の青年に対する思いには特別深いものがありました。先生の最晩年の文章を集めた『難思録』の中に次のような言葉があります。

「青年よ。我が愛する青年よ。私は君たちを見ること、接することがこの上なくうれしい。この心を仏天のあわれみましましてか、来る講習も来る講習も若人によって満たされてある。初めてわが光明団の講習に来た人は、あまりに青年によって満たされているのに驚かれるようである。噫、青年。君たちを思うと、熱いものの胸に満つるを感ずる。」

その夜晃先生と青年とのかかわりについて、具体的な事実を見てみたいと思います。

① 女塾の創設

昭和十三年(一九三七)四月、先生は結婚前の若い女性を預かって教育する女塾を始められました。遠近を問わず、同胞の娘さんが集まってこられて先生の薫陶を受けられました。常時十数名おられたのではないかと思います。塾頭は先生の岳父の石井梅窓先生でした。当時、石井先生の自宅が本部の近くの古江の高台にあったので、塾生はそこで寝泊りして、本部に通っていました。塾生は、聞法だけではなく、行儀作法や、当時の女性の身に着けるべき和裁、華道、茶道なども習っていました。石井先生も「論語」などの古典についてお話しておられたようです。本部で大きな会座があるときは、その前準備を手伝うこともありました。先生はこの塾生一人一人に対して、どうか念仏申す人になってくれよとの熱い願いを持って、惜しみない愛情を注いでいかれました。

この女塾は昭和一九年まで六年間続けられました。この期間に塾に入られた方がどれくらいおられたのか一寸はっきり分かりませんが、この女塾が縁となって、その後熱心に聞法され、僧伽を支えていかれた方々がたくさんおられます。

② 健民修練所の寮

昭和十八年九月から昭和二十年三月まで、呼吸器系の病気にかかり、回復途上にある広島文

理大、高師等の学生のための健民修練所の寮が本部の中に設けられました。この修練所は、当時、厚生省、文部省の指令によって全国の大学、高専に設けられたもので、その寮として選ばれたのが光明団本部だったのです。先生は学生への強い願いがあって引き受けられたのだと思います。三ケ月を一期として終了することになっていて、四期間の学生を預かられたようです。修練生の日課は決まっていて、彼等が夜晃先生の話を聞くということはあまりなかったようです。終戦後、健民修練所はなくなっても本部に残った学生が少しあり、その一人が岡部史郎先生でした。また、修練生の指導学生として本部に滞在された細川巌先生(当時は広島文理大の学生)は、夜晃先生の法話を聞かれて仏教に関心を持たれ、第一期の修練期間が終わった後も本部にとどまって、十二月初めの一週間の報恩講講習会に初めて参加されました。この会座での夜晃先生との出遇いがなかったならば、後年の細川先生の誕生はなかったのです。不可思議なご縁としかいえません。

③　師範学校学生とのかかわり

細川先生が広島文理大卒業後、広島師範学校の教師になられたために、先生の勧めによって師範学校の生徒が本部に出入りするようになりました。夜晃先生も二十年の四月と六月の二

回、広島師範学校で教職員と学生に対して講演しておられます。さらに細川先生は、学生課に申し出て、広島師範学校本科の第二寮を光明団本部に設けることを提案され、それが受け入れられて同年七月初め、十八名の学生が本部に移り、広島師範学校男子部高須寮として発足したのです。寮生は朝夕、仏前で「正信偈」をあげて勤行し、夜晃先生の法話を聞き、昼は毎日、宇品港のすぐ近くの金輪島の暁部隊に通って勤労奉仕していました。戦争末期の、物資のないこの時期に学生寮を引き受けることは大変な負担でしたが、夜晃先生の熱い念願によって実現しました。

やがて八月六日、広島市内に原爆が投下され、目を覆うような惨状の中、この高須寮生が細川先生の指導の下、被災市民の救護活動に挺身して、大きな成果を上げ、後に細川先生は広島市長から感謝状を贈られました。(「光明団と広島師範と軍港宇品と原爆といま」という書物による)

その頃の本部には師範学校生以外の学生も多数出入りしており、清明寮の名も出ているのですが、その輪郭や実態がはっきりしないので割愛します。ただ夜晃先生の青年に対するご教化として注目すべきことは、昭和十九年の一月から主に学生対象の「土曜講座」を始められ、二

十三年六月まで約四十六回続けておられることです。多い時は毎週ありました。講題は最初からしばらくは「歎異抄」で、終わりごろは「大乗起信論」でした。先生の青年に対する熱い念いを感ぜずにはおられません。

五、晩年の結実

終戦と夜晃先生

夜晃先生の四十代は、軍部の勢力が段々大きくなり、次々と事件を起こして戦争へとのめりこんでいく時代でした。昭和十二年七月に日中戦争が始まり、十六年十二月には太平洋戦争へと拡大し、最悪の事態となりました。先生四十七歳の時です。しかしそのような国の前途を深く憂えながらも、ほとんどの国民は戦争に反対するどころか、戦争の勝利を信じて疑いませんでした。先生も例外ではありません。先生といえども、現人神(あらひとがみ)である天皇を統治者とする万国無比の国体(国家体制)への絶対信順を植えつけた当時の皇民教育から逃れることは出来ませんでした。先生は、万世一系の天皇の聖徳こそ国民道義の中心であり、如来の徳と等しい、したがって滅私奉公、無我となって、皇国日本のために忠義を尽くすことが仏法者の使命であると考えておられました。先生には信奉すべき対象が二つあり、それがひとつになっていたのです。しかし、当時の時代社会の空気と、圧倒的な学校教育の影響を考えれば、このことを批判する資格は誰にもありません。

日本が戦争に負けたということは、そのような二元的価値観が完膚なきまでに打ち砕かれたということでした。これは先生にとっては相当大きな衝撃だったに違いありません。そのことを先生は次のようにおっしゃいました。

「日本国の形態は壊れた。滅ばぬものが二つあるのではなかった。いよいよ滅ばぬものはお念仏だけであるということがはっきりした。・・・・敗戦から立ち上がるには、宗教以外ないよ」（熊谷超雄先生に対して）

「一切が滅んで、お念仏のみが残りました。お念仏に生きさせていただく時であります。お念仏の中に、一切の重荷を受け取らせていただきましょう。」（内山内観楼氏宛書簡）

終戦によって余計な夾雑物が取られて、かえって念仏道の真実だけが明らかになったといってよいでしょう。先生の決意もいよいよ新たになったのです。

夜晃先生は、昭和二十年八月十五日の終戦の玉音放送を原爆のためにかなりの被害を被った本部の中で聞かれました。先生五十一歳の夏でした。その日から夜の勤行の法話は、「歎異抄」の総結の文の中にある次の文についてでした。

「・・・煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもてそらごとたわごと、ま

ことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」
先生はこの一文を四十九日間いただき続けられたそうです。
本部の建物は、原爆のために約七割損壊し、屋根等応急処置はされたようですが、危険性も考慮して、しばらく加計の佐々木権吾さんの家に疎開されました。
戦後、先生が口癖のようにおっしゃった言葉は、「念仏して自己を充実して国土の底に埋もるるをもって喜びと為すべし」でした。(この言葉はすでに戦前にも仰っておられたようです)
国土とは、もとより混乱の極にあった敗戦後の日本の国であり、社会です。天皇を中心とした国家(お国)のためにすべてを捧げることを求められた、その国家が敗戦によってもろくも滅んでしまったのです。国民は文字通り生きるよりどころを失って右往左往するほかありません。しかし気がついてみれば、その滅んだ国土の底に、人間の作った国土を超えた、したがって時代や人を超えた本来の国土、本当のよりどころとなる国土があったのです。それが仏法(本願)であり仏国土でした。このように、国土の底に埋もれるとは、念仏して本来の国土に帰るという意味があるのではないかと思います。
「国土の底に埋もれる」とはまた、具体的には一切の名利を超えて、いわゆる〝縁の下の力持

ち〟になることでしょう。念仏して自己を充実することこそ第一義の問題であると共に、危機に瀕した国家社会を救うたった一つの真実の道なのです。人はこの第一義の問題を忘れると、必ず名利を求めるようになります。

〝誰に知られなくてもいい〟、黙々と自分の為すべき仕事にまごころを尽くしていける人だけが、真に国土を支えるに足る人です。名利心に目鼻をつけたような人が何人集まっても、国家社会の危機を救うなどといったことは全くありえないでしょう。

ご晩年の先生

先生のご晩年とは、何年(何歳)からと考えたらよいでしょうか。これは人によって多少異なるかと思いますが、私は先生が満五十歳になられた終戦の年(昭和二十年)以後、お亡くなりになられるまでの四年間がそれにあたると考えています。

その根拠になると思われるものを一、二上げると、戦後の昭和二十一年に先生と遇われた、お同胞の故辻おふみさんの追憶文の中に、『わしも五十になったので、そろそろむしろを巻いて帰りじたくをする』との(先生の)常のお言葉が耳に残っている。」とあります。もう一つは柳

田智照先生が、「昭和二十二年の八月、山口県連の開講にあたって、『むしろを巻いて帰る旅だ』との先生の一言にふれて、ギョッとした。死を直視しておられるみ心に照らされたからだ。」と「光明」誌に書いておられる文です。

どちらも先生ご自身が、もはやしっかり晩年の自覚を持って生きておられることを示す言葉ですから、戦後をご晩年と受け取るのは自然だと思います。また、日本の敗戦を通して、先生の念仏の道に対する信念が一段と深く強くなったのは前述の通りです。

先生の晩年において特筆すべき大きな事柄が二つあると思います。一つは、故郷を離れて二十五年ぶりに、郷里にお帰りになったことであり、もう一つは団創立三十周年を迎えられたことです。

① 先生、故山に迎えられる

昭和二十二年四月、先生五十三歳の時、郷里の原村(中原)への帰郷が実現しました。大法に乗托してでなければ故郷には帰らないと決意して、その時の熟するのをじっと待っておられた先生のお喜びは察するに余りあります。先生は「思えば故郷を離れて二十五年、夢にさえ浮かぶなつかしの故里、故山も喜んで迎えてくれるであろう」(実弟の蘇晃氏あての手紙)と書いて

おられますが、まことに二十九歳の時、追われるが如く故郷を後にされて、その後帰りたくても帰れなかったのでした。安芸門徒の土徳の中にあって、新しい仏教改革運動に立ち上がられた先生を、郷里は決して受け容れようとはしなかったのです。ひとたび異安心というレッテルを貼られると、説かれている教えの内容(事実)よりもレッテルのほうが一人歩きしていくのは世の常です。

四月二十四日午前中に隣村の琴谷の西楽寺の会座を済まされた後、二十四日午後と翌二十五日の二日間、先生の生家のすぐ近くの本立寺で「六字釈」のお話をされました。黒板に達筆で板書なさり、聖典を開いて、驚くばかりのご説法だったそうです。柳田西信先生も、長女の公子さんも同伴しておられました。参加者は住岡家の親族を始め有縁の人々、隣村の同胞など三十名あまり、地元の人はやはり少なかったようです。実は本立寺のご住職は、初めは、すでに異安心の風評の立っている夜晃先生の法座を自坊で引き受けることをかたくなに拒んでおられました。それをお寺の門徒総代をしておられた岩見さん(斉藤タマ子さんの父上)が中心となって強く抗議してやっと実現したとのことです。しかし内陣には幕を張られて、本尊を礼拝することは出来なかったそうです。

その時講師当番をされた斉藤さんは、先生の「この村で一人でもよいから本当の念仏者が誕生したら大変なことがおこるよ」という言葉を聞いて、ヨシその一人にならせてもらおうとひそかに決心したことを思い出すと述べておられます。

先生は翌年の七月十七・十八日の二日間、もう一度本立寺でお話をされました。前年の会座の後、関係者の努力によって原支部創立の話が持ち上がり、その原支部の発会記念法座が持たれたのです。講題は「歎異抄総結の文」でした。そのときは本堂は人で満ち溢れ、地元の人々も沢山お参りされたようです。

十七日の夜は先生の生家であった前岡さん宅で盛大な歓迎の宴が催されました。当時原中学校の先生であった亀岡定美先生も参加しておられて、その時先生の心の底に強く焼きついて離れない光景を紹介して下さいました。それは宴会の途中に、夜晃先生の実弟の住岡秋作先生がツト立ち上がって、涙と共にしぼり出すような声でトツトツと話された言葉でした。「私の兄は、兄であって兄ではありません。私にとって兄は終生の師であります。・・・それは私ども弟妹、みなの心であります。」それを聞いた宴席の一同はしばし沈黙して、静寂の空気が会場を包んだということです。

② 創立三十周年

昭和二十三年四月一日、三〇〇名をこえる団員が参集した春季講習会の中日に、団創立三十周年式典が厳かに行われました。先生は翌二十四年十月に浄土へお帰りになったわけですから、この三十周年記念式典が結果的に先生の苦難に満ちた光明団運動を締めくくるものであり、総決算と言うべきものでした。考えてみると、今年九十周年を迎える本団の歴史の中で、先生は初めの三十年、つまり三分の一しかご存命でなかったということになります。まことに短いといわざるを得ませんが、しかしこの三十年の中にこそ、その後の六十年の団の歩みを生み出す秘密があったのです。大正八年一月、先生二十五歳の時、広島県北部の当時の飯室村において呱々の声を上げて以来、団の歩みは波瀾万丈というか、その前途は決して安閑としたものではありませんでした。経済上の問題に加えて、世間の一部の人々による念の入った反対運動や、非難、中傷の絶えることなく、そのたびに同胞も揺れ動き離れていったり、先生のご苦労は計り知れないものがありました。しかし先生の白熱のご精進と、何があっても決して動ずることなく一貫して先生を信頼し支え続けた同胞の熱い護念によって、団の歩みはますます確かなものになっていったのです。

三十周年を迎えたその感慨を先生は次のように述べておられます。

「今三十周年を迎うるにあたり深く心に誓うことは、いよいよ忠実に教法を聞信して、より純粋に一道を精進させて頂き、生きる日の限りを教法の為にあらしめたいことである。教法を聞信して信一念に安住し、何ものをも求めてはならない。唯忠実に正法に信順して全我を本願に託して、一生不退転に歩ませて頂くこと、それがたった一つの今日の私の心根である。一日生きれば一日、一月命あらば一月、一年与えられるならば一年、唯正法に生きさせて頂いて此の鴻恩を報じなければならない。恭敬合掌、唯限りなき感謝の中に念仏させて頂くことである」

もはや余命いくばくもないことを覚悟して、静かに自分に言い聞かせておられるような言葉ですね。

本団の年表によると、先生は、昭和二十三年三月下旬に山口の久米支部創立十五周年記念講習会(五日間)で講義され、その後すぐ、三月二十九日より四月四日まで、春季聖会を兼ねた一週間の創立三十周年記念講習会で「七深信釈」を講じられました。その疲れが十分に取れないまま、先生は四月下旬には島根の井野支部の創立記念講習会(五日間)、五月初旬には加計支部

の創立二十五周年記念講習会(五日間)、下旬には福山支部の創立二十五周年記念講習会(五日間)と、次々記念講習会を引き受けておられます。まさに記念講習会のラッシュですね。さらに六月下旬には一週間の幹部講習会を開いて「浄土論註」を語られました。そして八月はじめの本部の一週間の夏季講習会、それが済むと十八日から二十二日まで山口県連講習会(於右田・五日間)、ゆっくりされる間もなく、すぐに二十四日から島根県連講習会(於浜田・五日間)と、全く息つぐ暇もないような過密過激な日程が続いています。特にこの三月から八月にかけての半年間に、五日間の会座が六回、一週間の会座が三回と、短期間に長期の会座を持たれたことが、慢性腎臓病を抱えた先生のお体にどれくらい大きな負担をかけていたことか。後から考えると、もう間違いなく先生のおいのちを縮める暴挙にも等しいことでした。しかしこのような過重な日程を、ご本人はもちろん、誰も止めることは出来ませんでした。これらの会座はすべて、先生の長年のご苦労の豊かな実りにほかなりませんから、先生にとっても大きな喜びでした。しかしそれらが却って先生のおいのちを縮める結果になるとは、何という皮肉でしょうか。先生の晩年の悲劇というしかありません。

なお、団の機関誌「光明」は、昭和十五年(一九四〇)九月より、紙不足の対策として、当局の

指導により廃刊になっていましたが、戦後の昭和二十三年一月号から復刊されました。その復刊された「光明」の中で先生は、「日本を救う道」と題して、敗戦の祖国の現実を生きる決意と歩むべき方向を明快に述べておられます。

この文は、直接は教育者に対する願いの表現ですが、戦前の教育の誤まりを明らかにされると共に、「〝信〟の自覚」こそが日本の危機を救う道であることを強調されたもので、われら一人一人に呼びかけられたものと受け取るべきです。

（巻末に資料として全文を紹介しています）

コスモスの花に乗じて

ついに先生にとっての地上最後の年、昭和二十四年がやってきました。二十四年（一九四九）の本団の年表を見てみると、先生は一月早々の教育部会では、「親鸞聖人の仏性観及び仏身観」という講題で、いつもの通り説法獅子吼されました。三月末からの春季講習会もなんとかお話されましたが、五月の黒沢支部創立十五周年記念講習会は、花岡悲風先生に代講をお願いされ

ました。しかし七月の十三日〜十七日の広島県連講習会(於福山・光明寺)はどうしても自分が話したいと言われて壇上に立たれました。講題は「自然法爾(じねんほうに)章」でした。「自然法爾章」はこの年の三月(十六〜二十日)にも、右田支部十五周年記念講習会でも話しておられますので、先生が地上の最後にどうしてもお話されたかったテーマだったようです。

本部奥様の看護日記によると、もうそのお体では無理だからといくら申し上げても、先生は「黒沢支部十五周年の聖会にいけなかったのだから、今度はどうしても行く。最後になればなってもよい」といわれて聞かれなかったとのこと、やむなく奥様も福山までついて行かれました。福山に着かれたその夜から血尿が出るなど、食欲がなく、疲労が激しく、お医者の中井先生に毎日注射をしていただきながら、かろうじて講義を続けられたようです。午後は大森先生に代講をお願いされた日もありました。光明寺の本堂を埋めつくした同胞は、ハラハラしながら聴聞されたことでしょう。この福山での「自然法爾章」の講義が先生の地上の最後の講義でした。

八月の本部の夏季聖会は、主治医から絶対安静を命ぜられて、やむなく講義は花岡先生に託して、病床に横臥したままで迎えられました。最晩年の夜晃先生の言葉を集めた「難思録」の

中にある「病床述懐」は、この時の聖会の受講者に、病床の先生から伝えられたみ教えでした。この時の参加者の数は二百名をこえていたそうです。あれほど壇上に立ち続けてこられた先生が、ついに一度も壇の上に立つことが出来ないまま夏季聖会の幕は閉じられたのです。先生の無念は推して知るべしです。その後の本部の例会等は花田先生、山本(熊谷)先生、桂先生が代講され、また八月下旬の島根県連は柳田西信先生、九月中旬の山口県連(兼徳山支部十五周年)は、大森忍先生が代講されました。

奥様の「看護日記」によると、九月の先生は血尿、下痢、発熱が続き、腫れが顔全体に広がっておられた様子です。しかし夕食後みなで按摩してさし上げると、またしても御同胞のことを話され、また本部の一人一人のことを話されたそうです。ただならぬ病苦の中にあっても、先生の憶念の世界は深く豊かだったのです。

また少しでも気分のよい時は、「歎異抄」の第九章を静かに誦したり、善導和讃の「娑婆永劫の苦をすてて　浄土無為を期(ご)すること　本師釈迦のちからなり
長時に慈恩を報ずべし」をとなえておられたそうです。

先生が復刊された「光明」誌に書かれた最後の文は、「従仏逍遥」と題するものでした。二十

四年の八月下旬ごろ書かれたもののようです。この文の全文は、既刊の『住岡夜晃先生』(上巻)に出ています。先生がその最晩年にもっとも愛された言葉の一つが、「旅」であり、「旅人」であったということは、先生のご一生を貫いたものが往生人の自覚であったということではないでしょうか。

「しかし、止まってはならない。さよなら感激の花よ。・・大地の果てからしきりに喚(よ)びたまう声が聞こえる。私は新しい旅路に発たねばならない。」

このお言葉こそ先生の辞世の言葉にふさわしいものです。

十月八日には、奥様に、自分がなくなったら次のことを同胞に伝えてくれと、遺言をおっしゃったそうです。それは、

① 大蔵経ましますこの部屋を「夜晃堂」と名づけて、何ひとつ持ち出さないで、宝の室として守ってくれ。

② お念仏申してくれ、お念仏申すところが自分の遺跡である。

③ お念仏申すことをぬきにして、聞くことばかりをあせり、聞くだけの宗教になってはなら

ない。

十月十一日午前零時零分、先生は、ご家族、同胞の痛切な祈りもむなしく、静かにお浄土に還っていかれました。嗚呼、何ということか！満五十四年の短いご生涯でした。しかしその短いご生涯のすべてが、如来・真実の実在を証明して余りあるものでした。本願念仏の教えのみが人間の抱えているあらゆる問題を真に解決することの出来るただ一つの確かな道であることを、いのちを削ってわたし達に明らかにして下さった尊い御一生でした。

先生の追悼号となった「光明」の昭和二十四年十二月号に、十一日午前七時、「ヤコウキトク」の電報を見て、すぐに島根から本部までお帰り下さった岡本義夫先生の一文が載っておりますのでそれを紹介します。義夫先生が本部にお着きになられたのは十一日の夜十一時半頃だったそうですから、もちろんご臨終には間に合わず、先生のご遺体に直面されたその様子です。

「先生の御居間は厚いお布団の上に御遺骸、床には御名号が掛けられ、紙華ばな等が飾られてある。御通夜の方々の間を抜けて先生のおそばへよる。白衣を召され、御愛用のお数珠をおかけになり、美しい静かな神々しいお姿である。むくみもなく、御生前と少しも変わらず、白蝋の如きお顔は、今にも御法話が聞かれそうである。在りましし日の様々なことが思い出され

て、ただ申し訳ありませんと申し上げるより他に言葉もない。先生のお気に入りのこの部屋、床柱も大蔵経も部屋の中の一一のものが先生の御一生を物語る。そして『お念仏ひとつじゃ』と宣う声がしきりに聞こえる。」

十三日午後一時より、光明団団葬として本部道場で、しめやかにお葬儀が執り行われました。先生は「光明院釈夜晃」という法名を持った仏陀になられたのです。先生の御遺骸は同胞のささげた無数のコスモスの花に囲まれ、コスモスの花に乗じてお浄土に還ってゆかれたのです。遺弟のとめどない涙を置き去りにして。

〝コスモスは悲しき花よ　みほとけの　お顔うずめし　花にてあれば〟

（石田　律江さん）

先生が尊いご生涯を通して、おいのちと引き換えにわれらの為にこの地上に遺して下さった最大のものは、「真宗光明団」という僧伽でした。先生の尊いおいのちは、私たちの僧伽の中に脈々と生きているのです。

（了）

参考にした文献(資料)

○「住岡夜晃先生」(上巻)（自伝集記、年譜等）
○「　同　右　　」(下巻)（住岡夜晃伝他）
○「住岡夜晃全集」(全二十巻)
○「真宗光明団六十年史年表」
○「難思録」(住岡夜晃著・光明団本部)
○「光明団と広島師範と軍港宇品と原爆といま」

（編集事務局代表　空　辰男）

(註)「全集」は絶版になっていますので入手出来ません。今、それに代わるものを作る予定にしています。その他のものは本部で入手出来ます。

《付録》

【資料】(Ⅰ)

親しい若い皆様よ（檄文）

親しい若い皆さまよ！ 皆さまは今何を考えて暮らしていますか。何をなして暮らしていますか？何を聞いて暮らしていますか。朝から晩まで 考えることは、自分の利益にのみなることや、他人の出世や幸福を見て、悪(にく)むことや、どうかして他人に自分を賢く美しく思わせることばかりが多くはありませんか。皆さまは、濁った濁った世の人々が、自分のほうに自分のほうにと、自分の利益になることや名誉になることばかり考えたり、犬畜生が、一匹の魚を争うように、人と人とが、争い乱れているのを毎日見はしませんか。皆さま、こんな人たちの中で、やはりその勢いにひかされて、自分の利益や名誉にのみなることや、他人の財産や幸福や風体(なり)を見て、ねたむことや、親兄弟友人を泣かすことや、むだなお金を使うことや、自分の不幸を歎くこと、こんな事をなすことが多くはありませんか。

ああ！私はつまらない人間です。心は悪いことのみ多く考えていました。そしてそれが好きでした。目はやはり悪いことや、つまらないことを思うのが好きでした。耳は、世の中の賤しい出来事や、他人の不名誉になることや、無駄なことのみを進んで聞きました。口は他人を悪い様に言っておとしいれたり、他人を欺いたり、自分をかざるために使ったりすることに一番よく使いました。体は他人のためになることをした事は少なく、心から同情して人に物を与えたこともありません。世のため国のためにもまた力いっぱい働いてはいなかったのです。この手はつまらない事にも、親の辛苦の凝結(かたまり)であるお金を出しました。この足はあぶないところにもつまらないところにも行ったのです。幾度か、自己の理想や事業に向かって成功しようと大決心、大勇猛心、大奮発をおこした事はあっても、その十分の一も出来たことはない。

ああ、僕は自分ながら自分の心や体がなさけなくなりました。自分で自分を見下げはててしまいました。それだけでなく、人生の目的とは・・・幸福とは・・・宗教とは・・・こんな疑いも次から次へと出てきます。僕の目からは止めどもなく熱い涙が出て悲しくてたまらない。死ねばいいか、消えればいいか、生きればいいか、迷わなければならなくなりました。しかし、

僕は救われました。救われました。如何に歓喜が僕の心をおどらしたことでしょう。

若い皆さま、皆さまは現実の苦しみに泣いてはいないか。あるいはまた安価な享楽に一時の苦からのがれるに苦心しはしませんか。お金がなければ駄目だと悲しんでいる貧しい人はありませんか。親しい父母に早く別れて、この世をつまらないと思っている人はありませんか。自分が病気なのや体の弱いのをはかなんでいる人もありましょう。家柄が悪いと言われて悲観している人、不具なのが悲しい人、家うちが悪くて面白くない人、人に馬鹿にされて無念で残念で、瞋恚の炎に燃えている人、子供に親切にされないで泣いている親、親が自己の思想を知ってくれないと怒っている子供、自分で自分の意志が弱かったり、事の出来ないのを見くびっている人、こんな色々なことで苦しんでいる人はありませんか。迷う人は苦しい。ちょうどそれは煙の中にいる間はいくらもがいてももがいても煙たいのです。煙の上に出ましょう。眠りから覚めましょう。心の光を見いだしましょう。

皆さんよ、穢い泥の中にも蓮の花は咲いた。浮華文弱の元禄時代にも四十七士の精神的美花は開いた。世の中は悪魔の世の中となっても、その中に住む自分たちまでが悪魔となり、けがれては駄目です。目を覚ましましょう。僕と二人であの尊い光を見ましょう。献身的に努力

的生活に入りましょう。そうだ、二人で、ただ二人で働こう、苦しもう。その生活、その苦悩は、引いて永遠の幸福、真の感謝に入ることが出来るであろう。僕らには金はなくてもよい。働けば得られるから。食べ物はまずくてもよいではありませんか。それでも生きて行かれるから。人は自分等を悪く言ってもよいではありませんか。

自分の心さえ正しければ、たとえ前は悪くても、洗われ救われて正しくなれば。人の道をはづれて貯えた金が何でしょう。弱い者からいじめ取った富に何の価値があるか。大きな家も何だろう。人はその大きな家をはなれ、金銭、衣服、飾りをみんな取り除けて、生まれたままそのままと、それに自分の努力で勝ち得た精神的なある物とよりほかに価値を見ることは出来ません。僕らはもっともっと心が直くて飾らず、本当の自分をさらけ出してみようではありませんか。その時にのみ僕らは自分のつまらない事、悪いこと、いやな事が真実に知られてくるでしょう。

しかし、皆さんの中には「私はそんな悪いことはしない、自分は頭もよい、今もなお勉強を続けている、自分は自分で尊く思っている」こんなに言う人があろう。そんな人は夜色沈々として更ける時、独り自ら考えてごらん。不具の人を見たとき嘲笑をしたことはありませんか。

心から気の毒に思って泣きましたか。親から送った学資や買ってくれた着物を一度でも、ああすまないと親を拝んで使ったことがありますか。恩を受けた人に感謝しましたか。否、かえって恩を仇で返したことはありませんか。あなたを人がいじめたり、罵る時、その人を哀れな人間と思って、その人のために幸福を祈り、また退いて、自分の心や行を反省してみたことがありますか。解りましたか。かくした時、僕らはきっと自分のけがれていることに気がつこう。それで好い。自己不満を感じ、懺悔の涙にくれた時、そこには必ず救済の道が開けているでしょう

僕と一緒に行きましょう。まづ正しい「人」になりましょう。悪い心に責められた苦しみから、善を求める尊い苦しみに進みましょう。(実際は苦ではないが)それはきっと歓喜の趣味的生活に入るでしょう。僕一人より、あなた二人と、二人よりも、あなたの友と三人、三人より四人と、出来るだけ沢山の人と共に進みましょう。

ただ「僕らは楽しければいいのだ、金さえ得ればいいのだ、名誉にさえなればかまわん。苦しんで『人』になろうなどと思はん、人生五十年だ、太く短く、心愉快に自分さえ暮らせたらいい」こんなに思う人にはもちろん用事はありません。

僕らは人生のために、社会のために、神のために、仏のために働かなければなりません。烏合の衆が百人来てくれるより、醒めようと心から望むあなた一人が僕にはどれだけ嬉しいやら尊いやらしれないのです。

醒めんとする若い男子諸君よ、来れ来れ、しかして僕らを鞭打てよ。

君らは十日と風呂に入らないことはあるまい。一日として顔を洗わないことはあるまい。それなのに心を洗うことは一年に一度もしない人はないか。学校で修身の話を聞いても、物見がてらに一生寺に参詣しても何が得られよう。心を洗うとは、汚れた邪悪な心を一度でも善美な崇高な事項や、話や、行為や、精神によって、感激して心の垢を除けて心の光を出さすようにする事だ。僕らは一日に一度でもいい、心から懺悔し、黙考して、幾久しく、心の光明を見いだすよう、心の奥の深い泉を流して洗わねばならぬ。諸君の前途には幾多の艱難辛苦があろう。多幸な時は失敗の基だ、誡ねばならぬ。死にたいような不幸失敗があろう。その時すら、僕らは仏に感謝し、悲観の代わりに大勇猛心によって突破しなければならない。しかしその信念はその時に得られるのではない。今から醒めよう、今から真の人になろう。

ゲーテは「汝にして真に熱心ならしめば、後と言わず今直ちにこの瞬間において為すべきを

為しはじむべし」と言った。

若い女子の皆様よ、世の中には女子の使命たる「人生を美化し、浄化する」ことを忘れて、怒りやすく熱しやすく理知の判断をあやまって、目の見えない鳥の様に、至る所で鼻をうち、頭をうち、口をうって、ここからそこ、そこからかしこと、迷い迷って自分で知らないでいる様な人が世の中にいるのを、僕は悲しまずにはいられません。僕は女子を馬鹿にしたり、腹を立たせようと思って言うのではありません。姑息な愛や慈悲のために夫の一生をあやまったり、自分の一生を滅ぼしたり、子供の一生を反古にしたり、名誉ある夫の地位を失わせたりした者は古来、否、今の世も沢山あります。

同情は皆さんの最も大切な美しい宝です。そうです。至宝です。優しい皆様の心から流れて出る同情は、たとえば深山から清く流れて出る泉です。如何なる鬼のような荒くれ男の心でも和らげて人の情に泣かせます。その偉大な力は如何なる汚れたる者をも浄化し、如何なる無情な者をも翻然として人の道に活きさせます。よく考えてごらん、皆様のこの唯一の武器は如何に使われました。ともすればこの清い流れは濁って、しかも反対に流れはしませんか。人を嫉む嫉妬の滝となったり、瞋恚の流れと化したり、邪見の雨と降ったり、愚痴の湖となりはし

ませんか。奥に行きましょう。皆さんの心の奥の奥に遡って、この泉を力いっぱい奇麗に澄ませて、清いままを人に注ぎましょう。

若き諸君よ、親しき同胞よ、清き者はいよいよ清く、穢れた者は清められん事を求めて救われましょう。イエス・キリストは、五人の夫を持ち、一人の情夫を持っていたサマリヤの女をもとがめず、これを教え、これを救い、そして永生に入らせました。釈迦は菩提樹下で、心中の百千億万無量の悪魔と戦って、終に「無上正等覚」の位に入りました。一念発起するとき、弱き者は強められ、悲しき者は救われ、不幸の者は祈られます。自己の小さな知識を鼻にかけてはなりません。自分の汚れている事を嘆くこともいりません。奮闘しようと言うのです。救われようと言うのです。幸福になろうというのです。

将に精神的に亡びようとする村、家、字を目の前に見ています。そうです。あえて言います。利己のために亡びようとする村、字、家を見ては、いたずらにため息を出しているだけではなりません。夜半鈴張河辺の古樹は僕に「哀れなる亡びんとする村よ、倒れんとする字の人よ、もがいているのを見るのがつらいわい。若者よ、活きよ、醒めよ、正義の水に・・・」とあわれに悲しく歌って聞かせました。

諸君よ、奮え。諸君よ、醒めよ、人になろう。僕の言わんとすることはつきた。

心の琴線が僕の心と共に鳴る人、そうだと感じて大勇猛心の起こった人、醒めようと思う人は、一人でも、友達と二人でも、兄弟姉妹と三人でも、僕のところに何か書いて送ってください。好奇心や人真似や飾りの人は一人もほしくありません。こうして集まった人、それは真に語るに足る人です。他村の人も他県の人も少しもいといません。皆さんには知らない友が出来るでしょう。そして、僕は何かはじめたいと思います。

十一月十五日　　住岡狂風謹述

【資料】(Ⅱ)

日本を救う道　―教育者の皆様に捧ぐ―

個の尊厳の問題

一人の人間が全体を築く一個の煉瓦に過ぎなかった全体主義の時代は敗戦の悪夢の中に崩れて、再び人間の自由と人格の尊厳とが社会構成の基盤とせられる時代は訪れた。それは又何よりも嬉しく有難いことであった。今や何者の圧迫をも生きる背後に感じない時が来た。青天の下、大きく生き得る時が来た。

しかしそれはほんとうの人間の解放であったか、個の尊厳の発揮であり得たか。それとも猛獣群賊の荒野への開放であったか。いうまでもなく民族はその恥ずかしい姿を世界に暴露したのである。自由は放縦とはきちがえられ、強盗、窃盗、賄賂横行、無道義、無節操、等々、百鬼夜行のていたらくを出現してしまった。背後に加わる暗黒の魔手が去ってほっと一息の時、前に群賊悪獣の大群におそわれた形である。かくして個の尊厳は新しい課題として我らの手に渡されたのである。

未曽有の歴史的自覚

思うに事変中は画一的な枠の中にはめこまれて、ある美しさを保っていたかの如くであった。しかしそれは煉瓦壁の美しさ、キューピー運動の美しさであった。それが一度枠がはづされ、強制的な号令が無くなると、一度に野獣的本能的な力がおどり出て、一世を暗黒の中に包んでしまったのであった。世の識者はそれについて既に批判しつくした形である。いわく軍国主義の教育の結果、いわく他動的他律的注入教育の責任、いわく物資不足の結果、いわく無宗教の現実暴露等々、みな一応その結論の正しいことを認めざるを得ないであろう。

しかしここに我らが忠実に考えてみなくてはならぬことは、はたして美しきものが醜悪なるものに一変したのであるか、それとも本来醜悪であったものが、ただ形を変えたのであるかということである。神軍ははたして、神軍であったのか恐るべき鬼畜であったのか、それは今厳かに裁かれてある。

仏説によれば、まさしく人生は無明の海であり、生死の苦海である。神の国でもなければ浄土でもない。「三界無安猶如火宅」法華経の言葉は正しい。五濁悪世の中に住むものは一生造悪の凡夫でしかない。もとから穢悪の凡夫が高上がりしていただけのことである。この度の

ことは誠にこの憍慢に対する一大鉄槌を下されたのである。それである。誠にそれである。我ら民への歴史的自覚（それはかって一度もなかった）をうながす大否定の鉄槌である。民族の心に巣くう根強い我執我慢に対する大否定の鉄槌である。これから後起こる一切の諸現象は皆、この精神的大革命、未曽有の大革命を成就せしめんがための波動にすぎない。しかしてかかる歴史的精神的大革命の自覚は、まづ誰によってなされねばならぬであろうか。

信の自覚

それは誠に教育者であらねばならぬ。聖徳太子の時代にも、大化改新にも、明治維新の時にも無かったところの真に未曽有の大革新は、過去の時代のように、一人の英雄、一人の聖者によって成就されるのではなくて、かなり多くの人が中心となり、それがやがて国民全てに及ぼす力となって成就されるのである。それが即ち民主的改新だと思う。八千万の大多数は政治によらなければならぬものであるかも知れない。即ち衣食足らざれば国民は安定しないのである。しかるにその間にあって、政治によらずして生き得る人、即ち真に道を念じて内に自覚を成じ、この国土の苦悩を摂取し消化し得る健全なる胃腸の持主、まことに強い胃の腑の人が要る。個の人格の尊厳をいたずらに主張して他を顧みない似而非民主主義でなくて、内に真に

自覚による人格の尊厳を成じて次の世代を負う青少年にぶつかってゆく、真の教育者が一人でも多く誕生することより外に日本を救う道はあり得ないと思われる。

かくの如きの自覚とは実に親鸞のいわゆる“信”の自覚である。念仏の自覚である。まことに他力回向の大信とは、人生という大砂漠に湧くオアシスである。無限の闇を照破する如来本願の顕現であり、久遠の御いのちの泉である。一切の苦悩は、この泉に融合してはじめて、歴史的現実、永遠の現実となり得るであろう。世間虚仮唯仏是真、虚仮を照らし出すのは唯仏である。虚仮を虚仮と知って仏の真実に帰すれば、虚仮の信知に於て仏の真実は自覚感知せられ、苦悩の深さは如来真実の無限を信知せしめる縁となるであろう。

日本国土の至るところに地湧の泉が出現して来なければならない。そしてこの信の泉に民族の業苦の全てが受け取られて来なければならない。かくして如来は、民族の内奥にひそむ自力我慢我執を照破し否定し回心懺悔せしめて、民族を本然の相におき、内に金剛の信を成じて個の尊厳を顕現せしめたもうであろう。

あとがき

今年二〇〇八年十月十日は、真宗光明団の創立者、住岡夜晃先生が浄土へお還りになられてちょうど六十回目のご命日です。先生が逝かれてほぼ六十年たった今、同胞の中で、若いとき先生と出遇った人はどれくらいおられるでしょうか。毎年その数は減って、「光明団」にはご縁があっても、創立者の夜晃先生を全く知らない人々がドンドン増えておられるのは当然のことです。そういう背景の下、本団の「教師会」でも、夜晃先生はこんな人であったと、先生のことを紹介する本を作ってはどうかという話が持ち上がりました。遅きに失した感はありますが、今年は本団創立九十周年という意義深い年でもあり、その記念品として、「教師会」でそのような本を作ることになったのです。そこで、私が下書きをして教師会の皆さんに見てもらって作ったのがこの本です。先生にお会いしたこともない私どもが、先生の尊いご苦労のご生涯の全体像を正しくお伝えすることはとても出来ることではありません。その点は先生をよく知っておられる先輩の方から見れば不十分のところが沢山あって、大変申し訳ないことです。ただこの本の意図するところは、夜晃先生個人の、人並み優れた尊いお徳をクローズアップす

ることではありません。読まれた方は、先生個人と先生のお作りになられた「光明団」サンガとは、全く切り離しがたく一つのものであるということに気が付かれたと思います。この点が大事ですが、仏法のサンガは本来個人を超えているものであり、仏法(本願)の歴史に属するものです。夜晃先生も仏法のサンガに帰依していかれた方です。「光明団」は確かに夜晃先生なくしてはこの世に実在しなかったのですが、その「光明団」はサンガなるが故に創立者の夜晃先生を超えているのです。先生なきあと六十年もの歴史を生み出したことがその何よりの証拠です。私たちは、夜晃先生のご苦労のご生涯を具体的に知ることによって、恩知らずのわが身に目覚めると共に、いよいよ新しく、そのようなサンガの歴史を生み出す根源のこころ(意)に出遇っていかなくてはなりません。それがこの本の願いです。

二〇〇八年九月十六日

(教師会長)　堤　日出雄